明治卅六年四月五日第三種郵便物認可　毎月一回一日發行

# 家庭雜誌

第四巻
第六號

明治三十九年六月一日發行

Dai 4 Kan.　KATEI ZASSHI　Dai 6 Gō.



由分社
東京市麹町區元園町壹丁目廿七番地

徳不孤必

東京日本橋區南茅場町

# 有隣生命保険株式會社

電話浪花 特一一四番
二一八〇番

# 瓦斯引用の大御便利

燈火用
煮燒用
煖爐用

の瓦斯管**取附費用**（材料共）は本月より總て**申受けざる**ことに改め「ランプ」代は御自辨とし一燈に付**金九拾錢**以上御好みの品を取附け可申又瓦斯竈、七輪、西洋料理器、湯沸器等は御望に依り月賦にて最も割安に販賣可仕瓦斯煖爐は別に損料貸の便法を設け低廉の料金にて御貸渡し可申上候

機關用

は「メートル」の位置迄の取附費用を受けず又機關は御便利の爲め英國製最優等品を三ヶ年の月賦にて最も割安に販賣可仕候

●御申込は電話、はがき、口頭にて御通知次第係員出張可仕候

神田區錦町三丁目

**東京瓦斯株式會社**

明治三十九年五月

小林蹴月著
武内桂舟畫

好評嘖々!!!再版出來

# 小說ゑはがき帖

全一冊
定價五十五錢

神田小川町四十九番地
寶永館書店

## 中村春雨著　改版第十版

### 小說 無花果

定價金七十錢　郵稅八錢

無花果は在來陳腐なる舊套を脫して材を宗教に執り、信仰と人情の衝突家庭と社會の撞着より生ずるあらゆる悲劇が良好珠の如き女主人公の溫情と及び希望と良心の復活とによりて遂に愛と信仰に滿ちて和氣藹々たる樂天地となり行く光明小說にして百讀愛誦措く能はざるもの讀む者又此樂天地の一人となるべく家庭に於て最良の讀みものなり

## 佐野天聲著　新刊

### 小說 露の曲

定價金六十錢　郵稅八錢

情熱は金鐵をも熔かし情泉は岩をも裂く、露の曲一篇はこの情熱の力を描く、土を掘つては地獄の底までも行くといふ井戶掘の名物男、闇黑の重壓が眇々たる身の上にも人生天賦の愛情は天使の如く可憐なる童女に注がれ、千辛萬苦に掘り得たる十餘丈の井中よりさつと噴出づる泉と湧いてめぐみ露に開くべき心の花、濁る世にひねくれ、茲に火となる熱情は鐵槌一擊の血を見る運命となる、著者が情熱に富める筆力はわが小說界を動かすものあらん。

發兌元　東京市京橋區五郎兵衛町　金尾文淵堂

## 火鞭會編輯

### 戀愛觀

定價金三拾錢　郵稅六錢

戀愛は人類千古の大問題也。曰く男性の腐敗、曰く女性の墮落、冷情冴厭の如き方今の新聞記者や、微溫淡水の如き方今の道學者流や、此等の權暴なる言論と殘酷なる解釋とは、果して此間の鍵を握り得たるものなる乎　是れ吾徒が一片歎々の衷情禁じ能はざる所、敢て江湖先進の士、數十名執筆を乞ひて本書を編輯し更に吾徒青年が之に對する眞摯熱烈なる議論を告白し以て當今の所謂兩性問題の解釋に貢獻せんとす。若し方今の青年にして、深刻なる煩悶と苦惱との裡に向上の綱を掬はんとする者は來て本書に問へ。

## 伊藤銀月著

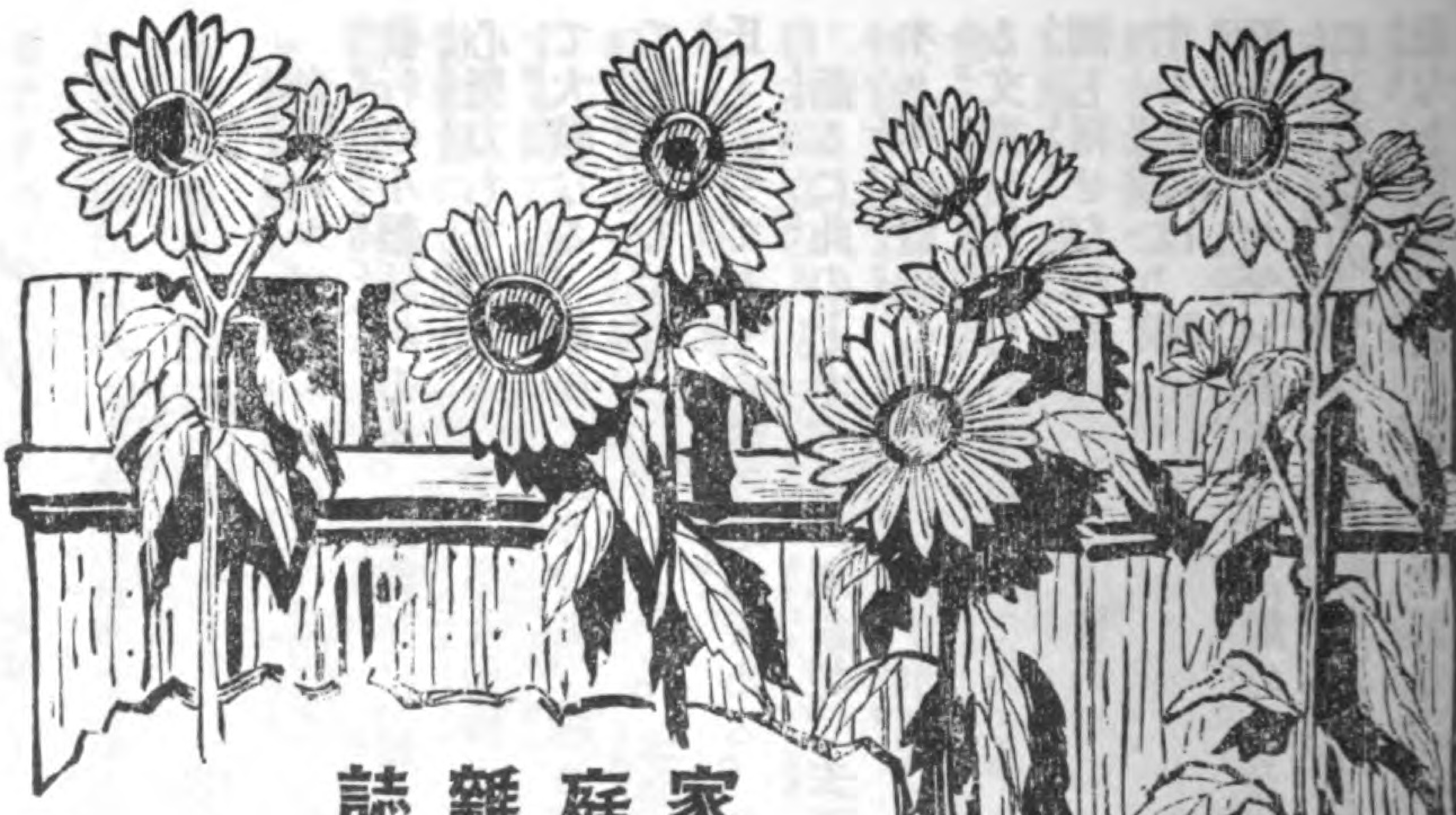
### 男女觀

定價金十五錢　郵稅貳錢

本書目次

男女容觀の近似▲毒婦と淫婦▲女丈夫は淫婦也▲吝なる男に對する女▲善き意味に於て男の如き女▲物食ふ顏の妙醜▲女の手管と男の手管▲老人虐待贊論▲男の遊びと女の遊び▲女學生の腐敗を喜ぶ▲處女說▲今のハイカラ式細君は女權を放棄する者也▲男の腹とは如何なるものぞ▲男女雜觀▲生れ月と容觀性格

發兌元　東京市京橋區五郎兵衛町廿二番　百藝雜誌社



# 家庭雜誌

第四卷第六號

明治三十九年六月一日發行

## 自然の保險

堺利彥



△或人が保險を勸めに來た。其話を聞いて見ると一々尤もだ。人間は老少不常だ。達者な樣でもイツ死ぬるか知れぬ。死んだ跡で妻子を路頭に迷はせるが本望でもあるまい。月々の掛金は僅かなものだ。それ丈の事をするのは妻子に對する義務だ。是非君はいり玉へと云ふのだ。

△然し又善く考へなほして見ると、自分が生きて居る間すら、我一家の衣食の保證がついて居ぬのに、死んだ跡まで考へて取越苦勞するのは馬鹿らしいではないか。元來人は、正直に勤勉に其職分を盡せば、自然衣食に困らぬ筈である。それでも困るのは自分が惡いのではない、世の中が惡いのだ。そんな惡い世の中に居て、幾ら保險にはいつたとて、生活の危險が保證せられる筈がない。

△そこで我々は此の惡い世の中を作り直す事に勉めて居る。そして差當り我一身一家の安心の道としては、親戚、友人、隣人等に對し、親切忠實の心を以て交つて居る。そして之を以て自然の保險として置くのだ。

# ハルマン翁の入獄

（米國の社會に於ける僞善道德の犧牲）

堺利彦

米國シカゴ市に Lucifer（明星）と題する二週間一回發行の小雜誌がある。此雜誌は『婦人の解放』の爲に專心努力して居るもので、男女兩性の關係に就ては極めて大膽なる、極めて進歩せる、極めて自由なる、極めて新奇なる、意見を持して居る。主筆は Moses Harman 氏と云つて七十六歳の老翁である。

然るに此の七十六歳の老翁が、去二月廿六日イリノイス州の監獄に投せられた。刑期は一年。罪は猥褻なる文書を刊行したと云ふのである。米國は言論自由の國と稱せられて居るが、一世の俗論たる僞善道德に反する言論は、猶ほ斯くの如き壓抑を受けるのである。吾人はハルマン翁が其の高齢の身を以て、其主義の爲に、其學說の爲に、僞善道德の犧牲となつた事に對し、限なき同情の感を抱く者である。



然し斯く云つたばかりでは、讀者諸君の中、猶ほ或は疑ひを抱く人があるかも知れぬ。衛生の名の下に隱れ、學術の名の下に隱れて、實は人の淫心を挑發する新聞雜誌の類が、日本といふ文明國には澤山あるのだから、『ルシフアー』も或は其類かといふ推測が出ようも知れぬ。そこで吾人は少しく茲に、ハルマン翁の人物と學說とを紹介せねばならぬ。

先づ次の頁に於けるハルマン翁の寫眞を見よ。是が下劣なる人物の顏であるか。吾人は他に何事を知らずとも、只だ此顏を見たばかりで、大膽堅固の意志と、高潔明敏の性情とを想像する事が出來る。次に翁が獄中より『ルシフアー』に送つた手紙の中に、左の如き議論が書いてある。

『予は入獄前、白人に使はれたアフリカの黒奴の境遇と、謂はゆる基督教國に於ける、男子に隷屬せる女子の地位との間に、類似點を擧げて論じて見たいと思つて居た。其大要は左の如し。

『奴隷の腹に生れた黒人は、何時まで立つても自主獨

立の人となる事は出來ぬ。彼は其主人の姓を名乘る。主人が變れば其姓も亦た從つて變る。女子も其通りで、結婚までは父の姓を名乘つて父に屬し、或は社會(僧侶及び裁判官)に屬して、自主獨立の人となる事は出來ぬ、そして結婚する時には、基督敎會の古式に從へば、何人かゝ其新婦を與へるのである、既に廿二歳になれるアリス・ルーズヴエルトが新婚した時にも、其式を行うた僧が『此婚姻に於て誰が此婦人を與ふるか』と問う



たのである、男子は廿一歳にして成年に達するが、女子は何歳になつても成年に達する事が出來ぬ。奴隷が其主人を變へた時と同じく、女子は結婚すれば、之を與へられた男子の姓を名乘る。其主人が變る度には必ず新主人の姓を名乘る。そして子が生るれば、其子は又其主人の姓を名乘る。『昔の奴隷制は一部分宗敎的で、一部分經濟的で、又一部分社交的であつた。僧侶は聖經の文句を引用して奴隷制を擁護した。自ら働かずして生活せんと欲する

人々は皆な此の強迫勞働の制度を擁護した。そして此の奴隷を有する事、若しくば之を使用するの能力を有する事が、上流社會に列するの資格となつて居た。女子を奴隷にするのもそれと同じである。即ち結婚も亦た一部分宗教的で、一部分經濟的で、そして又一部分社交的である。僧侶は無數の古言を引用して、神が男子に對する女子の服從を命じた事を證明する。「婚姻は天に於て成さる」「神の結びたまふ所のものは、人之を離す可らず」など丶云つて居る。然るに、妻といふものは又經濟上の價値を有して居る。ハスバンド(夫)とは家の主人を意味し、ワイフ(妻)とは機織を意味して居る。即ち妻は產物を作る奴婢である、賃銀なしの高等下婢である、然るに、結婚は又社交的の制度で、然るべき交際社會に入らんとするには、是非とも一夫一婦制の信仰を有して居らねばならぬ。實行は兎もあれ、舊式の信仰だけは奉じて居らねばならぬ。そして男子は其實行に就て餘り嚴重に責められぬ、が女子(即ち、下婢、奴隷)はそうではない。彼女は其行に於て少し



も其信仰に背かぬのみならず、少しの嫌疑を受け、少しの噂に上つてもイケナイのである。」

ハルマン翁の說は之に依つて其大體を窺ふ事が出來る。翁は實に女子の絕對の自由を主張し、「婦人解放」を以て其の畢世の事業としたのである。翁の目には今の婦人の地位の哀れさ、今の結婚制度の淺ましさが、實にアリ〱と寫るので、殆んど之を見るに堪へぬのである。そこで彼は其の哀れさ淺ましさを抉りいだして、視力の足らぬ世人に示して居るのである。すると僞善なる社會は之を見て不道德なり、破廉耻なり、猥褻なりと云ふのである。而も識者は翁を以て、奴隷解放の爲に盡瘁したギヤリソンに比し、シカゴの豫言者とさへ稱して居る。

吾人は左に、ハルマン翁の娘リリアン氏が翁を監獄に見舞ひたる記事を抄錄して、諸君と共に翁に對する同情を分ちたいと思ふ。

「三月廿六日、予は予の父と少時間の會見を遂げた。父の健康は衰へて居るが、其精神は頗る快活である。

然し若し此狀態にて進み行かば、父は恐らく一年の刑期中、其生命を保ち得ぬであらうと自ら語つた。……父は平生主として菓物のみを食つて居たが、今は其樣な食物を取る事は出來ぬ。四人は來訪者と會見中、來訪者の持つて來た物を食ふ事を許されて居たが、それを監房に持つて行く事は許されぬ。其日父は我々の訪問を豫期して居たので、朝から何も食はずに待つて居た。我々は父の好物なる林檎の善いのを撰りに撰つて持つて行つた。然し會見中、父は幾許もそれを食ふ事が出來なかつた。我々は其殘りを持歸るのを如何にも辛く思つた。……父は何の仕事をも課せられては居らぬ。然し紙もペンも其室內に許されて居らぬ。

『父は今深く手紙を受取る事を喜ぶ。讀む事ばかりが唯一つの仕事であるので、此際手紙を受取るのは何よりの樂みである。

『予は斯く父の消息を記したが、予は敢て之を以て世の同情に訴ふるのではない。『ルシフアー』の讀者が父に對して深き同情を有せらるゝは、予の善く知る所で



あるが、然し其同情は『惱む同情』に非ずして『働く同情』ならんことを望む。生命は固よりモセス、ハルマンに取りて甚だ甘美である。身體の自由は固より彼に取りて貴重である。然し彼の一身を捧げたる此事業は、彼に取りて生命よりも更に大なる者である。』

ハルマン翁自らも亦た多く手紙を送られんことを望んで次の如く云つて居る。『予は遠近の諸友人が、此際特に予の爲に勵ましと希望との手紙を書き送られんことを望む。慰めの手紙が來なくつては失心してしまふであらうといふ譯でも無いが、眞理と正義とを望んで共に其爲に働く人々と、常に親しく接觸したいからである。何も長い手紙には及ばぬ。又予の入獄に對する復讐的精神を含んだ文字は書いて貰ひたくない。』

讀者諸君の中、英文を善くしたまふ人々は、願はくば翁に同情の一書を送りたまへ。宛名は Moses Harman, Care of Chaplain, State Penitentiary, Joliet, Ill. U.S.A.

▲記者云。以上を書き終つて考ふるに、どうもまだハルマン翁の思想の說明が足らぬ。いづれ此思想に就ては予の著『婦人新論』の中にも書く積りであるが、兎にかく參考として次の一文を記載して置く。

# ハルマン翁の學説

堺利彦譯

ダルキン＝ワイズマン＝ハルマン

此三人の名を列べて書くのは或はおかしく見えるかも知れぬ。ダルキンとワイズマンとは生物學の二大家で、ハルマンはシカゴの豫言者と云はるゝ人で、其思想に於ても、其目的に於ても、實に大いなる差違がある。然し後世或は此三人の名を列べて記す場合が多くありはしないかと思ふ。それは此三人の説く所が或一大問題に於て聯關して居るからである。

ダルキンの生涯の大事業は、一切動植物の進歩の原因は、過去に於ても、現在に於ても、主として自然淘汰に在る、即ち生存競爭に於ける適當の生存に在ると云ふ事を證明したのである。總ての動物は其食物の増加の割合よりも一層速かに増加するといふマルサスの人口論より説起してダルキンは自然其間に生存競爭が起ると説き、そして其競爭に於て、最適者は生存して子



孫を殘すけれども、比較的不適當の者は漸々競爭塲裡より消失して、其子孫を殘さなくなると説いて居る。生存競爭の形は時に依つて異なる。昔は盛んに戰爭が行はれて、我々の祖先の野蠻時代に於ては、一部落、一團體、一時に悉く死滅した事などもある、今では病氣、飢餓、貧困等に依つて、人間の約三分の一は未だ其子を産まざるに先だつて死んでしまふ。斯く形は異なるが、生存競爭といふ事實は同一である。弱き者、愚かなる者は漸々に死滅し身心の强き者が生存して其子孫に其性質を遺傳する。是がダルキンの自然淘汰の法則である。

然るに、一八五九年、此眞理が發見せられた時、多くの博愛家は大打擊を蒙つて、どうかして此の恐ろしき生存競爭より人間を救ふ事は出來ぬかと云ふ考へが起つて。玆に於て人に制限論が現はれた。我々が食物の増加する割合よりも速かに増加して居るのならば、そして其の速かなる増加の爲に苦しんで居るのなれば我々は其増加を制限すれば善いでは無いか但し我々が

人口を制限して競爭を少くすれば、我々の進化は遲くなるかも知れぬが、それにしてもマア其方が樂では無いか。

是は至極尤もな說の樣に聞えて居た。然るに不幸にもワイズマン其他の生物學者が現はれて、更に新たなる發見を爲したので、此說はメチャ〱になつてしまつた。曰く、若し自然淘汰或は他の不適者の播殖を妨ぐる方法が行はれぬならば、人間は決して現在のまゝに靜止する事は出來ずして、必ずや漸次退步するであらうと。ベンジャミン、キッド氏曰く、何種の生物と雖も、各時代の各員が一樣平等に生殖を爲すならば、各時代の平均は必ず其前時代の平均より下り、斯くて緩漫なる而も確乎たる退步が來るであらうと。

茲に於て我々は惡魔と深淵との中間に立せられた。一方には此儘に前進して進化を遂げるかと云ふであるが、然し其進化は飢餓凍餒の悲慘の上に立たねばならぬ。さらば人口の增加を制限して生存競爭を止めるかといふに、それにしては、自然淘汰以外に何等か適者



を撰んで生殖を爲さしむるの或方法を見出でぬ限り、人間は漸次に退步するといふのである。

此難問題に對して種々の意見が提出せられた。或人は、醫學上、適者として免許せられざる者には子を產むを許さぬ事にせよと立案した。或人は又、不適者は宜しく自ら生殖作用を造需すべしと主張した。然し二者共に到底行はれそうに思はれぬ。

此時に於てモセス、ハルマンが現はれた。そして此問題に眞の解決を與へた。ハルマンの解決法は、其子の父に對する婦人の自由撰擇である。ハルマン曰く、子を得んと欲する總ての婦人をして、全く自由に其父を選ばしめよ。さすれば此問題は解決せらると。

父を選擇する事が進化上甚だ有効であるとは、家畜の歷史に於て證明せられた所で在る。牛馬等の家畜には、人間が十分の食物を與へるので、生存競爭は殆んど全く無いのであるけれども、此五六世紀の間に於ける家畜の進化は、人間や野獸の進化に比して、更に一層速かである。是は注意して親を撰擇したからで、親

といふ中にも主として父の撰擇の結果である。

そこで殘る問題は只だ、普通の女子が果して善く眞の適者を撰び得るかと云ふのである。それは如何にも問題である。然し普通の女子は、脊の高い、强壯な、決斷のある、立派な男子を敬愛する。機智、同情などの諸徳も亦た必ず女子を喜ばせるであらう。只だ男子の深き智識が果して直接に女子の心を引き得るか否かは疑問であるが、併し男子が其の深き智識を以て其社會に榮譽を博するならば、矢張り其上に於て大いに女子の心を引くであらう。されば男子身心の諸徳は一として女子の心を得るの役に立てぬ者は無いのである。

斯く見來れば、ハルマンが此の人間進歩の大問題に眞の解決を與へた事は、いよ〳〵明瞭となるのである。

(R.B.Kerr「ルシファー」記載)

▲記者云。此說は必ずしも記者の全然同意する所では無い。記者は斯くの如き個人間の競爭が、人間の進化に必要であるとは思はぬ。人間は大いなる社會を組織して居るので、他の動物の如き個體間の競爭に依つて進化するものではないと思ふ。然し其事は今こゝで十分に說明する暇はない。然し女子が全く自由に男子を撰ぶ樣にせねばならぬと云ふのは記者の全然同意する所である。兎にかくハルマン翁の說が甚だ新奇にして、深き學問上の根據を有して居る事を見て貰へば善いのである。



# 米國に於けるゴルキー

（彼と一女優との關係、米人の僞善道德）

四月十八日　紐育　金子喜一

△四月十日ゴルキーは紐育に着せり、予は十三日朝十一時、彼と會見をとげたり、露國現代の文豪にして、吾が黨のチャンピヨンたるゴルキーは、一見凡人の如くその大きく開ける眼、やさしき口元、而して粗大なる體格は、宛然、田舍農夫に逢ふが如き心地せずんばあらず。

△この日は所謂文壇の名士が揃ふてゴルキーを訪問せし日なり、予はゴルキーのホテルにてエドウイン、マークハムとも會せり、「スタンダード石油會社史」を書きて名をなせし、タアベル女史とも會せり、詩人ブリス、カーマンとも語れり、ゴルキーはこの日甚だ滿足に見受けられたり、この同情ある面會者に接見せし也

△然るに一日をこへて翌十四日、ゴルキーの評判は一變せり、彼がその妻として連れ來りし者は、まことの

妻にあらずして、露國の一女優なりしことの判明せしより、コンヴエンショナル道德家氣取りの米人は、遽にさわぎはじめたり、曰く結婚式もあげず、最初の妻と離縁することなくして、而して一女優をひき來りて予が妻なりと曰ふ、何ぞ吾等米人を馬鹿にするの甚だしきや、吾等は婦人を扱ふことかくの如く殘酷不德義なる人物と相語るを好まずと。

△ゴルキーとその先妻との間は、恰もワグナーの場合の如く、シエーレーのそれの如く、最も悲むべき場合なりと雖も、これ又推すべきものなきにあらず、ゴルキー今に於てなほ先妻とその兒女を養ひつゝあるなり、唯だ露國に於ては離婚なるもの甚だ容易ならず、故に先妻の間もそのまゝに殘され居るなり、然るに彼等米人は此のこみいりたる情狀をも察せずして、直に不德漢を以てゴルキーを遇せんとす、何ぞそれ淺薄なるの甚だしきや。

△十四日午後、ゴルキーはその止宿しつゝありしホテル、ベルクレヤーを追はれたり、彼は他のホテルに轉



せり、又追はれたり、彼は更らに友人の名を以てなは他の宿所を求めたり而も又追はれたり、而してこの憐むべきゴルキーはこの大都會たる紐育に一身を寄するの家なく、轉々として一所より他所へと追はれゆけりゴルキーは遂に姿をかくせり。

△ゴルキーは曰く「吾が妻は吾が妻なり、吾が愛は眞なり、何物の儀式も、吾等夫婦の神聖を神聖ならしむる能はず」と、流石ゴルキー也、この大膽なる告白は慥にその人物の如何を語るに足る、彼は革命家也、豈に徒らに世間並みの道德、儀式に拘泥して、一生を夢死せんとする凡俗の徒ならむや、その信ずる所これを行ふて恐れざる、革命家の本分也、職務也、生命なる也。

△予はゴルキーに對する米人の態度にあきれたり、平生自由を口にし、デモクラシーを曰ふの米人としては余りに大人氣なき也、世界の文豪として、露國の戰士として、ヒユーマニチイの勇將として、トルストイと共にその名をほしひまゝにせる人物に對して、狹隘極まる僞善道德を以て律せんとするは、誤れるも甚だしから

ずや、……ゴルキーの人格、ゴルキーの精神、ゴルキーの主義は彼等ヒポクリットの玩弄物たるを許さず、寧ろ彼等に好まれざるを喜ぶ。

△十五日の夜、ゴルキーはこの狂氣ぢみたる米國民の評判にも係はらず在留露國人に依りてグランド、セントラル、パレースに招かれたり、而して集まるもの數千人、入場料のみにても三千弗を越へたり、盛ならずとせんや、ゴルキーは所謂富豪には好まれざるべし、所謂道徳には喜ばれざるべし、所謂紳士社會には歡迎せられざるべし、然れども正義を念じ、人道を思ふの士は何れも彼の友なり、……ゴルキー揚言して曰く『予は予獨り起つ時、最も力强し』と。

▲記者云、此一文と次の幸德氏の一文とは、『光』より轉載したのであるが、予は讀者諸君が此二文を熟讀して、米國の社會が如何に其表面だけに於て道學者然たる態度を取るかを考へて戴きたい。猶ほゴルキーに關する此事實と、ハルマン翁入獄の事とを考へあはせて、米國のみならず、文明社會の總てに於ける僞善と虚飾とを十分に見て取つて戴きたい。



# ゴルキーと米人の僞善

四月廿一日　桑港　幸德秋水

△先日マキシム、ゴルキーが夫婦づれで紐育へ奔竄して來た、彼は米國から大に本國の革命運動を助けるつもりであつた、所が露國政府に買はれてる新聞通信なぞが、其婦人は實の細君ではなくて女優であるてふことを觸れ散したので、僞善なる米人の非難がヒドくなつて、三回まで旅館を逐立てられた

△女優であらうが藝者であらうが餘計な世話ではないか、殊に此女優は熱心な革命家で、露都の一富豪から百五十萬弗を引出して革命運動に投じたといふ女丈夫だのに……

△米國位ひ自由なやうで不自由な國はない、所謂アングロサクソン、ヒポクリット（英吉利人種の僞善）でね、僕はゴルキーに對して同情に堪へない

▲記者云。ゴルキー氏は近々日本に來遊するよし、日本の道學者連、若しくば僞善なる新聞記者等が、米國の眞似をして又何か云ふかも知らん。

# 女學校に交際科を設くべし

中尾清太郎

今日の教育の弊は、實に種々なりと謂ふべし。趣味を缺く、其一なり。主義を缺く、其二なり。自由を缺く、其三なり。殊に政府縁故の諸學校に於いて、其弊の最も甚しきを見る。然れども姑く是等教育上の大體論はさし措きて、こゝには文部省の訓令を奉ずる中等程度の女學校に就きて、聊か評論を加ふべし。

文部省は豫て天下に公宣して、高等女學校は良妻賢母を造り出だすを以つて其主眼となすべしといへり。然も良妻賢母の主義(?)は、教育上の討議に於いて、又過去の事實に於いて、見ん事失敗に歸せるにあらずや。されば先覺の教育家は、早く既に人格養成を唱道し、女子は女子として教育すべきこと(To educate as a Woman)を呼號し、高等女學校ひとり必ずしも世の父兄の信用を多大に繋げりとも見るべからざるに至れり、然るに思ひきや、近時女學界の流行(然り流行なり!)は、漸く學問の高きを捨て、只管技藝の低きに就かむとする氣勢を示し、造花、生花、點茶、裁縫、料理は勿論、琴、ヴイオリン、ピアノ(今日の音樂は手頭の音樂なり。)の如き、舊時代の遺法に據る躾方にあらざれば、單に手頭の修練に過ぎざる末技に趨りて、肝腎の精神修養、品性陶冶のことは、毫も顧みられざるに似たりとは。これ女學界一部守舊派に屬する現象なりといふべからむも、此派の團栗共は割合に大多數の末社陣笠を包容して、宛然政界の政友會の觀を倣せり。而して其大頭株、下田女史の如き、三輪田女史の如き、若しくば茗溪出身の代表とも見るべき山脇女史其他の如き、相不變「實際主義」とやらむ、保守風を吹かせ、敢て新時代に適應したる内的準備を與へむとはせず、寧ろ時勢の進歩を餘處にして、ひとり後に退郤せむとするが如き傾を有てり。忌々しと言はざるべからず。

抑々今日の如き新時代に際して、最も憂ふべきは、尚男子の教育と女子のそれと、相平行せざる點に在り。

固よりこれには保守派の種々なる反對說あるべしと雖も、事實に於いて、新時代に新家庭を造りたるもの、不和合不一致は、多くこゝより萠すといふべし。

幸ひに（余は幸ひにといふ。）舅姑ある家庭にては、却つて新夫婦の和合一致を見るべしといへども、若し新夫婦にして、理想の家庭を現實に看出ださむとし、遠く舅姑と離れて別居するが如きことあらば、男子と女子との間に於いて、犬も喰はぬ痴話喧嘩以外、學力の相違、新智識の懸隔より、思はぬ衝突を演ずることあるを期せざるべからず。夫れ新夫婦の痴話喧嘩は可なりと雖も、これは亦餘りに情なき次第といはざるべからず。而して皆これ文部省流儀の良妻賢母主義、實際主義より來たれる弊竇なりと知らば、豈に痛嘆すべきの至ならずや。夫は進步的にして、妻は保守的。一方は新智識に肥えて、他方は舊時代の躾方に馴らさる、彼に情的同情を失ふことあれば、此に智的同情を缺くことあり。其間愛情膠漆の如くなるも、時に寸隙の生ずるなきを保せむや。新家庭の悲慘は、實に是れに外ならず。



然るに今回、余輩の多大なる希望を以つて待ち構へたる新文相の女子教育に關する演說の一節を讀むに、例の良妻賢母の奬勵にして、殊に女子を男子と等しく教育せむとするものあるをいひて、痛く之を批難せられたり。想ふに新文相多年の先進國滯在も、教育の光明面を見ること能はずして、歸來偶々屬官等の囁嚅に耳を假し、特に下田、三輪田等の大頭株を中心とせる女學界近時の傾向を聞き、又且つ文部省の歷史に顧みてか、從來の弊風を刷新する底の破天荒の意見も出で難ねしなるべし、文相の位置こそ可憐なれ。

余の交際する二三夫人の進步的なるもの、言を聽くに、「烹厨、裁縫のことの如き、いと容易なるは無し。烹厨の如き、實に結婚前何等の經驗もなかりしが、未だ曾て些の不都合を感じたることなく、又夫より不機嫌を買ひたることもあらず。裁縫の如きも、亦然り。袴羽織の難しきは、よし縫ふべき手ありとも、忙しき時は他人に賴まねばならず。初より之を知らざりとて

左程の不便もなかるべし。唯悲しきは學問と、自己の人格の上がらぬことなり」とありき。此夫人の言の如きは、即ち高等女學校に在りて、所謂明治の教育を受け、新家庭を造りたりといふもの丶代表的嘆聲と見るも可なる也。これ豈に今日の女學校に於ける教育の方針の誤れるものあるに基づかずして何ぞ。

是に於いて、余は一策を献せむと欲す、若し高等女學校に於いて、俄かに之を採用する能はずとするならば、せめては政府の管轄外に立てる諸種の女學校に於いて、先づ此企あらむことを切望に堪へざる也。一策とは何ぞや、即ち(女學校の上級に)

交際科を設くること、是れなり。

此科に於いて、專ら社交的智識と其方術とを授くるに在り。今日の高等女學校卒業程度にては、年齡體格こそ既に結婚の資格もあり、且つ我邦の習慣として女子十七八歲にもなれば、早く結婚を急ぐ風ありて、卒業後直ちに結婚するもあれど、未だ學問、人格に於いて、男子と均衡せざる恨あるのみならず、社交の智識に至



りては、全く零なるを普通とする也。但之を補繕するものは家庭の母の責任に在りといはむ人もあるべけれど、又余輩とても爾く言はむことを冀へども、今日の家庭の母にては、固より左樣なる教育は賴むべくもあらず、到底これも學校教育に待たざるべからずと思へば、玆に應急當面の處置として、先づ四方の女學校に、此交際の一科を設け、新時代の進歩を助け、新家庭の悲慘を救はざるべからざる也。

さて然らば其教授方法は如何にするかといふに、そは修養饒かなる教師の伎倆に繫れり。或は適當なる話題を設けて、教師生徒互に主客となりて談話を交換するも可。或は其日々々の新聞紙面を籍りて、其出來事を談じ其時論を評するも可。或は雜誌新刊書に現はれたる時代の思潮を抽出して、之を是非するも可。例へば『野口男三郎事件に就きて』といふが如き話題を設くるならば、教師先づ此事件の過去と、之が刑事問題となりし理由とを語り聞かせ、それより曾惠の素行態度の批評、男三郎の研究、二人者間の交情、更に寧齋と

の關係より、溯つては寧齋の如何なる人物、即ち彼の文壇に於ける位置、伎倆等より、延いては彼の交遊より、槐南を論ずるもよし、槐南より伊藤侯を論ずるもよし、伊藤侯より現代の政治家を評價するもよし。それからそれへと談話の材料は流れて盡きざるべし。恁くして的確に、誠實に、批評し、紹介し、種々なる社交的方面の智識を注入するに努むべきのみ。而して其談話のしぶりには、洒落も滑稽も、利益ありと認めたらば隨分縁遠き話にても、構はず挿みて聞かすべき也。かゝる間に生徒をして、批評の才も養はせ、觀察の法も學ばせ、談話のしぶりも巧妙ならせ、自然に人を笑はしたり、人をそらしたりする手心匕加減も合點さすべし。たゞ是れ今日の女教師にては恐らく不可能事とすれば、成るべく新智識に富みたる男教師をして、之にあたらしむるを適當なりとせむ。斯くして琢き上げたる女生徒は、最早人前に押し出しても、よく男子の談敵となるに堪へて、へこまされざるべきを期し得べしと信ずる也。



世の父兄や教育の門外漢には、存外盲目者が多くして、中には高等女學校卒業といへば、餘程學問も出來、新智識もあるやうに思ひ做し居れど、內實は決して然らず。今日の高等女學校卒業にては、辛ッと入口多き普通學の門戸にと惑ひしたるまでにて、まづ〳〵何にも知らぬ方なりと見縊るを以つて、却つて大なる誤謬を生ぜずとなすべきのみ。然るに其卒業生が、常に比較的學問新智識に携はり易き境遇に進みつゝある男子と配して、一分のひけをも取らぬやうに行かむとは、固より請合はれぬ相談なるべし。されば斯かる新夫婦の結合には、尠からぬ危險の分子を含み、啻ならぬ憂慮のたねを貽すものと豫め覺悟せざるべからざる也。唯之を拯ふものは、速かに一般女學校の課程に交際科の一目を据うるにあるかな。

而して最後に、余は此提供が、目下の男女交際論の疑問を解くに足る一關鍵たるべきを附加せむと欲する也。（五月十六日稿）

# 菜食主義

巣鴨三月二十八日

幸徳秋水

▲家庭雑誌記者としての枯川足下、枯川と呼んで悪るければ堺君足下、だが僕は枯川ッと呼棄てにドナルのが口癖になつて居るから矢張それで許してくれ

▲菜食論に就ては、僕の入獄中に、君は大に調査研究を積んださうだから、一度大に講釈を承らうと思ふ中に、此方へ來て仕舞つて殘念だつたが、此方でも僕は熱心な菜食論者否な菜食實行者に出喰したよ

▲其一人は兼て報した露國革命黨の婦人ミセス、フリッチさ、職業は産婆で今醫科大學に通つて居る、年頃は五十足らずである、鳶色麵麭と果物の煮たのばかり食つて居て、暇さへあれば革命主義と菜食主義の功能を喧ましく說き聞かせる

▲僕と加藤時也君とは、此婦人の家に一室を借りて居て、三度の食事は平民社へ食ひに行くのだが、兩人其弱いから時々風邪や下痢で、二三日も寢て居て出られぬことがある、スルとお婆さん直ぐに來て診察して、親切に看護してくれる、夫れ迄は善いが、平民社の諸君が持て來る食物を一切斥けて食べさせない、例の吟味に吟味を重ねた麵麭や菓物の煮たのを少しづゝ宛がつて置く、彼女は僕等の病身なのはドウしても肉を絶たねば直らぬと主張して居る

▲成程彼女自身は強い、朝は五時から、時としては三時から起きて臺所をする、七時から學校へ行く、晝に返つて、又三時頃から又行く、夕暮返る、其間、家事の一切を切廻す、夜は十一時前に寢たことはない、一時迄起て居ることも屢々だ、學校へ通ふにも、買物に行くにも曾て電車に乘たことがない、日本の婦人なぞには到底夢想しがたい勞働をして、平氣である

▲他の一人はチカゴの婦人でミセス、メリルといふ、年齢は四十五歳、末世教會の熱心な信者だ、若い時分には非常に弱くて、胃病と溜飲で苦しんだが、菜食を實行した結果十五年來、醫師に掛つたことがないと言

て居る、此人は自分の家で學校を開いて、朝九時から夜の十時迄授業を續けて居る、其間に料理も洗濯も裁縫も掃除も皆な自分でするのだ、女中なぞは使はない、買物にも十數町の下町迄矢張歩いて出掛るのだ

▲全體此地では家事の設備が、よく調つて居る爲めでもあるが、餘程富豪でなければ、雇人を置かぬ、又置くことが出來ぬ、萬事主婦や娘なぞが立働らいて居る

▲此學校にミセス、クレメントといふ老人が同居して居る、滿七十六歳だといふから日本の數へ年なら七十七八になるのである、此高齢な老人が、矢張朝九時から夜の九時頃迄、生徒を敎へて居るのは、驚くではないか、此婦人も亦嚴格な菜食實行者で、其エナーヂーと健康とを以て全く菜食のおかげだといつて居る

▲露國婦人は、隨分感情は烈しいけれど、質朴で親切な人である、二人の米國婦人も、極めて温良で少しも飾り氣のない、日本の田舍の人のやうである、外人にありがちの人種的偏見なぞは微塵もない

▲僕の出會つたのは、以上三人だけだが、菜食は可な



り盛んに行はれて、米國各都市に雜誌も出て居れば、菜食の食料品ばかり賣て居る店もあり、菜食の料理屋もある

▲併し菜食といへば、直ぐ大根、午蒡、葱なぞを想像するのだが、彼等の食ふのは主に菓實と穀物で、蔬菜ではないのだ、メリル夫人は『ヴェヂテーブル（蔬菜）は水分が多く纖維が多く消化が惡いから、餘り喰べません、私はヴェヂタリアンではなくてフルータリアン（菓食者）です』といつた、否なヴェヂテリアンの字の代りにフルータリアンの文字も時々用ゐられて居る

▲斯くして僕は病氣の時は、全く肉を絕て菓實主義になるが、腹工合は大きに善いやうだ、山内夫人も先月出產後は、產婆がフリッチ夫人なので、數週間固く肉食を禁じて、梅や、無花果や、杏子やなどの乾したのを一所に煮つめたものと、小麥のクラッカーのみを用ゐて居た

▲要するに肉の營養分が、いくらパーセントで、野菜の營養分が、いくらパーセントなぞいふ勘定は、左程

必要でないやうだ、又大した相違はない、夫よりも尤も注意すべきは、肉類は長く胃腸の中に在つて、そして早く腐敗し易い、從つて有毒な黴菌を多く生じ易い、是れが人間の病氣になる原因の大部を占めて居るといふ事實だ、殊に競爭的經濟組織の下に在て、商人の腐敗の甚だしい時には、萬國何處へ行ても、病牛や死牛の肉の賣られて居ることは、殆と普通のことである、餘程胃腸の強い者でなくては、肉食は非常の危險といはねばならぬ

▲穀物や菓實は、飯でも麵麭でも、道明寺でも、ビスケツトでも、林檎でも蜜柑でも、梅でも杏子でも、肉のやうに腐敗し易くない、若し腐敗すれば直ぐ鑑別される、彼等は消化し易いので、長く胃腸の中に在て、黴菌の肥料となる恐れはない、古來肉に中毒したのは多いが、穀物や熟した菓實に中毒したのは尠ないのだ

▲で僕は菜食主義、否な果實主義を實行さへして居れば、大抵な病氣は免がれることが出來るであらうと信ずるに至つた、枯川ッ君はどう思ふ



## ●トルストイと菜食主義

△トルストイは理論に於ても、實行に於ても、菜食家である。

△トルストイの二人の娘も亦た其父と共に菜食家である。

△娘達は牛乳と玉子とだけには反對しないが、トルストイは一切の肉食、食物性の食物、煙草、コーヒー、茶、砂糖、其他あらゆるアルコール性の飲料を斥けて居る。

△トルストイはバタの代りに油を用ゐ、偏桃にて製したる飲料を飲み、乾葡萄を煎じて茶の代りにして居る。

△トルストイの著に「第一歩」(The first Step) といふ小冊子がある。人間善行の(克己)第一歩は肉食を禁ずるに在ると云ふのである。其小冊子の中に、トルストイが或屠牛場を見に行つた記事がある、其文字は實に悽愴を極めて居る。次の號に譯して見たいと思うて居る。

# 菜食主義に就て

堺利彦

此一文は去年の春、「直言」に載せたものであるが、今幸徳君の菜食論を載せる序に、參考の爲め玆に轉載する。然し斷つておくが、僕は菜食主義を實行して居る譯ではない。

## （一）

予の幼年時代には、一般の思想として多少肉食を忌み、魚と雖も佛の日には精進をして食はず、鷄の如きも内に飼つたのは食ふに忍びぬと云ふ風であつた。然るに其後牛肉を食ふ事が行はれて來て、少々薄氣味の悪い扱ひはしながらも、何分これは旨いと云ふので、追々平氣でヤル事になつた。然し、或時予は近處の屠牛場を見に行つて、裸の男が先の尖つた鐵の槌を振あげて、布で以て目かくしをされた眞黒い牡牛の、角の眞下の眉間の處を、勢ひこんでガツシリと打ちおろし只一打に其の大きな物を打仆したのを見て何とも云はれぬ恐ろしい感じのした事があつた。又或時、二三の友人と共に、面白半分、短刀で以て鷄の首を叩き切つ



て、跡で大變イヤな氣持のした事もあつた。さりとてそれが爲に肉食流行の新機運に反對する氣などは少しも無く、丁度學校の敎科書の論語を讀んで、『斯るが故に君子は庖厨を遠ざく』ぐらゐな處で折合を附けて居た。

それから予は國を出て東西に流浪する間、頻りに西洋文明の物質主義を吹込まれて、菜食の日本人は到底肉食の西洋人に及ぶ事では無い、何でも日本人も是から盛んに肉食をやつて、先づ其精力元氣を旺盛にせねばならぬ、旨い物を食はずに强い者になれる筈が無い、豚でも牛でも構ふ事はない、何でも盛んに食はなくてはイケナイ、と云ふ樣な議論にかぶれてしまつた。

## （二）

處が、先年動物虐待防止會といふが起されて、予も亦平生深く犬や猫を愛するの故を以て、勸められて其會員の一人となつた。然るに、此會に列して以後、動物に對する予の感情が稍鋭敏になつて、動物を殺し、動物を食ふ事に對する、子供の時からの不快の感が復

活して、折に觸れては不安を感ずる様になつた。例へば、鯉の生作りの、肉のピリ〱と動くのを食卓に見た時、雀の燒鳥の、丸い頭のツル〱したのを箸にした時、内の鷄の犬に噛まれて死んだのを、ムザ〱棄てるも惜しいものだと、それを煮て食うた時など、餘り善い心持では無かつた。それから又、屠牛場の殘忍極まる光景を寫したトルストイ翁の一文を讀んだ時など、子供の時の記臆が明瞭に再現して、非常に強い感動を與へられた。それらの事からして、色々考へまはして居る中、動物虐待防止會などは何だか餘りに兒戯の様に思はれて、肉食問題まで遡らなくては、到底論にも話にもならぬ様な氣持になつた。

(三)

扨又一方には、社會主義の思想が漸々細やかに予の腦中に消化せられるに連れて、矢張り肉食の疑問に到着した。世の競爭論者、成功論者、弱肉强食論者、奮鬪的生活論者等は、生物界の生存競爭を見て、人間社會も是でなければならぬ、是より外に進歩の道は無いと論じ、其勢ひを以て階級制度を是認し、奴隷制度を是認し、貧富の懸隔を當然なりとし、多數の貧民を犧牲として少數の富豪を作るを自然の道なりとし、同胞人類を踏みたほし、蹴たほし、喰ひころし、嚙みころすも差支ないと云ふ様な結論に達して居る。然るに、社會主義者は全く之に反對して、人類同胞の共同生活を理想とし、自由競爭に代ふるに相互扶助を以てし、動植物界の悲慘なる境遇を脱して、安樂なる無競爭の社會に入らんことを望んで居る。そこで此勢ひを以て進む時には、恰も競爭論者が生物界の競爭を人間社會に適用して、人間社會の階級や貧富を是認すると同じ様に、社會主義者としては又人間社會に於ける共同生活の理想を生物界一般に適用して、更に廣大なる共同生活を望むに至るべき筈である。即ち、人間社會に於ける喰ひあひ、嚙みあひを非認するならば、動物界全體に於ける喰ひあひ、嚙みあひも亦之を非認せねばならぬ譯である。此に於て肉食に對する疑問が生じて來る。

（四）

平民社の社會主義研究會にも毎度肉食問題が持ちあがつた。「社會主義の共同生活は人間の社會にのみ行はんと欲するもの乎」「人間と動物との境界線は何處に引く乎」「文明人と野蠻人との差は、野蠻人と類人猿との差よりも大にして、類人猿と人間との差は類人猿と普通の猿との差よりも小だと云ふでは無い乎」などいふ質問も出た、更に進んでは『よし肉食を廢した所で、植物も矢張り生物では無い乎、最近の學説に依れば礦物も亦生きて居ると云ふでは無い乎、然らば人間は結局何を食物とすべきである乎』と云ふに至つた、當時予は只『我々の同情の進むに連れて、漸次に之を高等動物より下級動物に及ぼし、更に之を植物に及ぼせば善いでは無い乎』と云ふ風に答へて置いたが、予の心の底に於ては、更に之を植物に及ぼし、更に之を礦物に及ぼした末はドウなる乎と云ふ疑問が猶存して居たそこまで疑問を起して、それに解決を附けて置かねば、此の宇宙の大調和の希望に眼が付く樣な心地がして、



どうも十分に滿足する事が出來なんだ。

（五）

其後、幸徳君が神田の古本屋で、菜食協會から發行した小冊子を見つけて來たので、それも三四冊買つて置いたし、英國の雜誌『新時代』に菜食協會の大會の事が書いてあつたので、それを摘譯して『平民新聞』に載せた事もあつた。そこで此の菜食協會と云ふのは、今より五十餘年前、始めて歐洲に設立せられて、會員は菜食を實行しながら、機關雜誌を發行し、小冊子を出版して、熱心に傳道に勉めて居る。

此の菜食協會の主義とする所は、肉食を廢して現今の殘忍なる食物制度を一變し、人類將來の理想郷に向つて一歩を進めたいと云ふのである。然しながら此協會の主張する所は、決して單純なる感情のみではなく、人道の上より、美術の上より、衞生々理の方面より、社交經濟の方面より、種々に科學的研究を遂げて、而して後菜食の當然自然を論證して居るのである。今日普通の議論としては、人は肉食に依らざれば、十分の

健康、十分の精力が得られぬ樣に云はれて居るが、菜食主義者の説に依れば、人は菜食に依つて始めて眞に身心の健康を得ると云ふ。又、歯の構造から見ても、消化作用の難易から見ても、人は決して肉食に適して居らぬ。現に人間に次ぐ所の最高等動物たる猿類は肉食をして居らぬでは無い乎、など丶説いて居る。又更に進んでは、人間の情慾の徒らに猛烈にして醜悪を極めて居るのは、多くは肉食の結果だと説いて居る。

然るに、菜食協會は必ずしも一切動物性を食物を廢するとは云はぬ。卵と牛乳とは許す事になつて居る。そこで或反對論者は之を嘲笑して曰く「卵を食ふのと鷄を食ふのと何が違ふ、牛乳を飲むのと牛肉を食ふのと何が違ふ、之を分析して見れば、化學的元素は同一では無い乎」と。菜食主義者は之に答へて曰く、「我々は化學を語るのではなくて道徳を説くのである、卵と牛との間には道徳的價値の差がある、足下にして若し其差を認めぬならば、足下は何故に人肉を食ふ事を忌むか、牛肉も人肉も、之を分析して見れば化學的元素は同一では無い乎」

此答は「植物も亦生物では無い乎」と云ふ問題にも適用する事が出來る。菜食主義者は必ずしも菜食を以て究極の理想とはして居らぬ。只理想に向つて一歩を進めると云つて居る。理想の究極に到達する明かな道が發見せられる迄は、一歩も進むことを肯せぬと云ふのは、道理の無い話である。一歩と云ふ點から考へれば、獸肉を廢して魚肉のみを用ゐるも亦多少の進歩である。

（六）

此に至つて予の考へは稍定まつた。宇宙の大調和の希望など丶云つて、そんな大それた事が我々の思慮分別で分るものでは無い。「土ヲ食テ蟲ヲ食テ跡ア何ヲ食オか」と燕が囀つて居ると云ふ話があるが、そんな先の事まで取越苦勞をせずに、それは謂はゆる神の攝理（と云ふが厭なら、進歩向上せる將來の人間の智徳の計ひ）に任せて置けば善い。そうして一歩でも進み得るだけ進んで行けば善いでは無い乎。現に我々は梅の水

枝や松の若芽をムザ〳〵と切るに忍びぬ心地がする。又六角繫然と結晶せる水晶を碎くに忍びぬ心地がする。然しながら大根や、蕪や、芋や、栗や、米や、麥や、それを食ふには未だ少しも忍びぬと云ふ感じが無い。そこで其の忍びぬ事だけ止めるとすれば、それが旣に一段の進步では無いか

斯く考へが定まると同時に、一方には肉食に對して少しづゝ厭な感じが增し、一方には菜食に對して多少迷信的の感情が生じて來た。元來予は田舍の山の中で貧乏に育つた者であるので、菜食の趣味は非常に多く養はれて居た。大根も好、芋も好、豆の如きは最も好である。それに考へが斯樣に變る間には、豆の含有する蛋白質は牛肉のそれに劣らぬと云ふ高木兼寛君の說に注意したり、フランクリンが菜食をした結果、非常に頭腦の明晰を覺えたと云ふ話を思ひだしたりして、いよ〳〵菜食的信仰が增して來た、例へばホウレン草の、サモ柔かそうなシタシ物でも出來て居れば、其の靑い葉と其の赤い莖との色の配合などが、何とも云はれず床しく感じられて、非常に嬉しくそれを食ふと云ふ樣になつた。迷信と云つても、林檎を食へば頰の色が林檎の樣になると云ふ程では少しおかしくなるが、



『肉を食ふ者は肉慾的になる』と云ふ風に說かれて見ると、成程と云ふ氣にもなる。

## （七）

カーペンター氏の如きは實に左の如く云つて居る。

「人間中樞の精力を養はんが爲には、果實、種子等より成れる食物を以て最も適當と爲す。肉食は一時神經的元氣を起すの効はあるが、畢竟それは局部を興奮させるので、中樞の統制力を失はせる事になる。又多く肉食する者は病氣に罹り易い。それも體の病氣ばかりで無く、其心が種々の情慾と悲哀とに陷り易い」種子食物(例へば果實、穀粒、根塊、豆、卵、乳の如き)は、其の緊縮したる形の中に多量なる生命の原質を含んで居て、而も之を取るが爲に生物に何等の害を與へぬ。彼の蕪の如きすら、其根を殺がれて煮らるゝ時に、我我には聞えぬ苦悶の叫びを發して居るかも知れぬが、彼の苺の如きは、願はくば此の實を取れと云ふが如く、其の美しき赤き玉を捧げて居るでは無い乎」

余は此文字の中、どこまでが科學的でどこからが詩的であるかを判定し得ぬ。然し何にせよ余は甚だ多く此文字に依つて心を動かすのである。

# 紀念畫葉書買損ねの記

巖穴生

我輩は帝國主義の信者では無いから、敢て紀念畫葉書杯を欲しがる必要は無いが、實は田舍の老人に頼れて、餘儀無く芝の三田クンダリ迄買ひに行つてマンマと首尾能く買ひ損ねたと云ふ珍談がある。

五月六日の朝八時半頃ブラリと家を出で、友の雄子と四谷見附で街鐵に乘らうとしたが、どの電車も皆滿員の札がブラ下つて居るのでしやう事なしに三宅坂迄膝栗毛を走らせ、やつとの事で築地兩國行の電車に乘り込んだ、そしてしばらく立往生の苦を嘗めた後、日比谷公園前で三田行の電車に乘り換へた。

何故我輩は態々三田クンダリ迄出張したかと云ふと繪葉書賣出所の混雜は前々から承知して居るから、成るべく人の行かぬ片鄙の處が善からうと言ふので、扨てこそ三田行と決定した譯だ、夫れで若し三田で買はれなければ白金の郵便局迄行かうと云ふ目算であつたのだ。

處が行つて見ると、人の行かぬ所の話では無い、此處も又多分に洩れぬ大混亂で、三田郵便局の前は人波でワツワツと云ふ騷ぎだ、最も警官の注意が行屆いたと見へて買手はチヤント二列に隊を組んで比較的行儀が宜かつた。三田郵便局の表口は板で圍をして入らしめず、横手に矢張り板で小さな入口を拵へて其處から一人宛通しては郵便局の横口の窓で賣出して居るのであつた、二行に列んだ買手の一隊はワツワツと言つて後から押して居るが、巡査の警戒頗ぶる嚴重なので左程の騷ぎも爲得ぬ。我輩と友の雄子は此有樣にしばし茫然として居つたが、折角此處迄來て買はずに歸るは使命を全うする所以にあらずと妙な處へ理屈を附けて、行列の後にクツ付かうと思ふて田町の通りに出で見ると、蟻の行列の樣な買手の一隊は目の及ぶ限り續いて居て何處が果だか分らない、多分品川邊迄續いて居るだらうと思つた。此れでは到底駄目だと我輩は終に絶望して斷念して仕舞つて、そして行列の前に立つて暫時見て居るとイヤ種々な奴が居る、白雲頭の小僧も居れば洋服の安官員も居る、蝶々曲の小娘も居れば袖到

腕の書生も居る、法被にクリカラ紋々の兄いも居れば
ヨボ／＼した老爺さんも居る、宛然百鬼夜行の鬪だ、
而して其の御面相は何れも餓虎と言ひたいが實は餓狗
の食を漁る的、蟻の甘きに就く的の頗るマヅイ面附の
もの計りである。ヤイ馬鹿野郎共、蛆虫共、糞虫共、
ソンナに繪葉書が欲しいのかと我輩は腹の中で大きな
聲を出して罵倒した、しかし此罵倒が彼等に聽へぬの
で幸であつた、若し聽へたら夫れこそ帝國主義の野良
猫共に嚙み殺されて仕舞つたかも知れぬ。
我輩はつく／＼感じた、日本人の強いのも無理は無い、
ロシアに勝つのも無理は無い、高が紀念繪葉書を買ふ
にさへ此れ丈けの狂熱と忍耐とあるもの、況んや敵國
外患ある時に於てをやだ、我輩は必私かに大日本帝
國の前途を祝した、かういふエライ愛國者共を有する
日本帝國は萬歲だ、軍國主義萬歲だ、藩閥政府萬歲だ、
貴族富豪萬歲だ。そして日本の帝室萬々歲だ。
我輩はフト或外人が日本人の愛國心を批評した言を思
ひ出した、ソレは下の如くだ、日本人の愛國心は到底
智識と道理の上より想像し得らるゝ所にあらず。
併しながら、彼等が斯く大騷をして怪我をして迄も先を
爭つて買はうと言ふのは果して彼等自身の必要に出で



たのか、或は必要もあらう、けれども彼等の多くは自
分が買占めて愚直なる田舍者や、買ひ得ざる者に法外
の價値で賣附けんと云ふ慾得づくの必要に出たのは明
白の事實である。法外の値で賣附ける奴も賣附る奴だ
が、コンナものを一圓も二圓も出して買ふ奴も買ふ奴
だ。必竟彼等の熱狂せる愛國心も詮する所は利益の問
題に過ぎぬのだ、かう思ふと彼等の愛國心も頗ぶる心
細くならざるを得ん次第だ。
我輩は餘り馬鹿々々しいから、近所の湯屋に飛込んで
繪葉書買の行列の騷ぎでかぶせられた塵埃を落して歸
つて來た、繪葉書買が入湯に化けて仕舞つたのも頗る
滑稽では無いか。
明る朝の新聞を見ると、どの新聞も繪葉書賣出郵便局
の混雜に就いて記して居る、やれ何處の局では何人氣
絶したの、彼方の局で幾人怪我をしたの、やれ鍛冶橋
から江戸橋の本局の前迄行列が續いたの、やれドコの
局では窓の硝子を破壞されたの、又た彼方の局では消
防隊が來て買手の群集の上へポンプで水を掛けたが、
夫れでも退かなかつたと云ふ樣な珍奇な記事に充滿て
居る。
嗚呼、日露戰爭の副產物は妙な物だ。

# 登山の感

中尾傘瀨

某月某日、某の山に登る。春正に闌にして霞める山々の上には、層雲のどかに靉き亘れり。輒ち思ひ浮かべたるは「自然と人生」といふ問題なりき。

やがてひとり問題の範圍を狹くして「山と人生」といふことを考へたりき。

地は載せ、人は歴史を作る。地と人との相關を說くは、既に古りたり。古りたりと雖も、こは滅びざる事實なるを如何にせむ。余は先づ

▲山と宗敎と

より、語り始むべし。エスの大說敎は、エルサレムの宮の見ゆる山の上にてなされたるにあらずや。モオセの十誡は、シナイの山の上にてエホヴより授かりたりといふにあらずや。モハメットは山に入りて、所謂 Allah akbar Islam の大眞理を悟り、出でゝ後も、每



歲一回 Ramadham（九月）とて、山中靜寂の地に退きて、瞑想に耽りしといふにあらずや。而してこは是れ彼の後繼者及び信者の今日に至るまで守るところにあらずや。シヤカは如何。彼こそ最も山に緣ある宗敎の開祖なれ。否彼の宗敎こそ、最も山に緣深けれ。彼は妻子珍寶及王位を捨て、雪山に逃れしが、彼の敎の隱遁的なる、寧ろ厭世的なる傾向は、多くの追隨者をして、山へと赴かしめたり。日本の佛敎も有髮妻帶の親鸞出づるまでは、全く山の宗敎なりき。親鸞出でゝ、山に據りし寺院は巷に移され、山に入りし僧は、肉を食して在家と伍し、遂に初めて穢多の群にまで傳道するに至りし也。かくて平地に下されし寺院も、未だ山號といふものを廢せざるぞをかしき。次は

▲山と政治と

なり。多くの國事犯罪は、山にてなされたるを見る也。

フランス革命の經過を知るものは、其間に山岳黨、平野黨の稱呼ありしを記せむ。

ロマの共和政時代に於いて、平民が貴族の抑壓に堪

へかねて、相率ゐて屢々聖山に逃れ、次第に權利を伸張したりしを知るべし。

わが邦此類殊に多し。平親王將門と藤原純友とは、比叡山にて謀叛の口約束をなしゝにあらずや。

由井正雪は、賤機山に楠公出自の僞系圖を匿しゝ以來、丸橋忠彌の一組と道灌山に密議するまで、山と離れぬ關係ありしにあらずや。

平野次郎の旗擧せしは、生野銀山にあらざりしや。

吉村寅太郎等の天誅組は、吉野山に據りしにあらずや。

戊辰の彰義隊は、上野の山に據りしにあらずや。

武田耕雲齋、藤田小四郎の徒は、筑波山に楯籠りしにあらずや。

明治になりても、富永正安等の所謂加波山事件ありしにあらずや。

▲山と文學と

萬葉集中の絶唱は「なまよみの甲斐の國、うちよする駿河の國」といひ起こしたる不二山の詠にあらずや。



唯一個不二山に就きても、優に「山の文學」を集大成し得るを知らむ。竹取物語の如きも、觀察法によりては、全篇不二てふ山に關する一の說話とも見るべからむ。

而して天智天武の妻爭ひを、大和の三山にたぐへたる詠は、更に好個の神話文學にあらずや。

抑々美の原理は「動」にあるべし。山の美も之れに「動」を配して、美初めて生ずべし。されど余惟ふに動かぬ、移ろはぬ山其者は、確かに神秘なり、怪物なり。坂上郎女は、春山と秋山とを比較して、其優劣を歌ふたれど、そは未だしと謂ふべし。余は時の關係を離れ、處のいかなるありさまを問はず、赤裸々たる、眞黑き、物言はぬ、花もなき、鳥も啼かぬ、雲も靡かぬ山其者を寫象して、天地の靈、宇宙の個性と相擁くが如き感あり。山を愛する者、豈古の仁者のみならむや。

▲山と愛情と

日本武尊の「あづまはや」の歎は、碓氷嶺にて發せられたるにあらずや。

佐手彦の妻マツラサヨヒメは、領巾振山にて夫を戀ひて石となりしにあらずや。

例の「妹山脊山」は、雛姫と久我麿との末遂げぬ戀を語りて、可憐を極めたらずや。

＊　＊　＊　＊　＊

余は斯く聯想を續けつゝ、漸く巓に達して、稍遙に四方を瞰下せば、恰も『淺緑染めかけたりと見るまでに、春の柳は萠えにけるかも』の景色ありて、柳ならぬ木々も、悉く新芽を吐きて新裝を凝らし、其間を點綴する花は、今しも櫻こそ滿開なれど、梅の咲き殘れるも、遠く見てよき桃、李、さては瓣薄き杏の交れるも、取り〴〵になつかし。良暹法師ならねど、此の景色をなつかしみて立ちやすらへば、花は笑ふが如く、緑は物言はむとする風情あり。是に於いて、余が聯想は再び馳せて、

▲自然と生命と

いふ問題に入れり。余は袴を着けて路傍に整列せる土筆を見ては、彼等に生命あるを想はざるを得ず。余は黄金の浪を打ち寄する菜種の花が『妾の簪を賞めてよ』



と、物言ひたげに頭を擡げつゝあるを見ては、彼等に生氣あることを否定する能はず。然り其答よ。吾等は彼等の仲間より、日々の生命の糧を得つゝあるにはあらざるか。吾等が生命の源は、却つて彼等に在つて存せざるか。若し然らば、吾等は彼等なくして已む能はざる也。少なくとも動物食ありて、植物食なくんば、吾等の血液は荒らさるといふにあらずや。この理は生理學的、醫學的に説明し得べきと共に、其説明の裡おのづから道德的提醒を含むを想ふべし。之を明白に云へば、植物食は道德性を養ひ、動物食は破戒性を養ふとなる也。

或學者の説に據れば、礦物にも亦生命ありといふ。既に動物に生命を與ふるものが植物なりとすれば、植物を養ふ礦物に生命あるは不思議にてもなき也。而してこはギリシヤのタレエスが磁石の鐵を引くは、靈魂(生氣)あるが故なりと説きしものと一般、一は科學的にして、他は推理的なるのみ。

また英國のペツトラフ、ペアク氏へ、ラヂウムにラヂオ、プと稱す

る生命の起源あることを云へり。之に關する實驗は今盛んに學者間に行はれつゝあり。

余は今それまでには極言せざるも、又ラヂウムに就いては知る所なしと雖も、せめて此生命あること明かなる植物に就いて、其自然美を愛すると共に、其道德的暗示を味ひたきもの也。凡そ生ける者を殺すことの慘酷なるは勿論にして、佛教の如き、特に殺生戒の設さへあり。されば佛教の盛んに行はれたる我邦にては、中世貴族の大饗にも、雉の足の外は膳に上せざりしといふ也。然も基督教には殺生戒の如きものなし。『すべての物は、爾曹の爲に造らる』。殺すも活すも爾曹の勝手なりとやうに解せられ易しと雖も、事實は即ち然らず、又其意味も然るべからず。動物に對する同情は、ロマ時代――基督教發生の時代より次第に發達して、今日に於いては歐米到る處、動物保護會の設あらざるなき也。而して近頃は我邦にも、此主義の會合あるを見るに至れるは喜ぶべき現象と謂ふべし。然れども余は更に此意を推擴して、植物保護會の成立せむことを



望みて已まざる也。かの西洋へも流れ行きたる遠州とか池の坊とか稱する生花の、撓め折らるゝ慘酷のさまを見ずや。かの我邦へも入り來たりたる花環花束の、剪み截らるゝ悲痛のこゑを聞かずや。

余は茲に故ヘルン氏の逸話を憶ひ出でざる能はず。彼生前、隣地瘤寺の庭の榎の大樹を愛したりしが、偶々寺僧の之を他に賣りて、遂に其大樹を切り倒すことになりてより、彼は連日聞こゆる其鋸の音を、泣かむばかりの不快の色をあらはして堪へ忍びきといふ也。余はヘルン氏の一代の文豪なりしを識ると共に、彼の人情敦厚の性格を欽すること、いと切ならざるを得ず。また『近時男女と天才』の飜譯によりて、我讀書界に紹介せられたるワイニンゲルも、草莖を踩みにじらむことを恐れて、曾て牧場を横斷らざりきといふにあらずや。あゝ天の物を暴殄せざる人は誰にても慕はしい哉。

昔も須磨寺の制札には、辨慶が『一枝を折る者は、一指を斷ずべし』と掲げしといふにあらずや。

余はキリストの「野の百合花を見よ、神は今日野に在りて、明日爐に投げ入れらるゝ草をも、斯く裝はせ給へば、況して爾曹をや」といふ聖句中の、今日野に在りて明日爐に投げ入らるゝとは、一面確かに人間の慘酷を誡めし意あるを認めむとする者なり。名高き宣長の歌も、大和心を山櫻に譬へたるを見る也、然も其山櫻をも心なく伐り取りて、薪とする世は悲しからずや。

尊徳翁が報德の本旨も、或意味に於いて、濫りに天地間の美を傷け、自然の生命を奪ふものを戒めたらずんばあらず。

要するに自然を愛すてふ習慣は、やがて人間の美意識に貢することと大なると共に、道念に益することと更に大なりと信ずる也。即ち高き趣味、温き同情は、斯かる間より湧き出づるものなるを信ずる也。



# 父の婚禮

（クロポトキン自傳の一節）

上司小劍譯

私を愛して呉れた私の母は、私の十五の時に死んだ。私は悲みの中に日を送つてゐたが、二年の後に、私の父は二度目の婚禮をした。

父は、母の死んだ後、内々で、其の眼の光を或る、若い、美しい娘の上に投げかけて、今度は金持ちの家から、其の妻を求めやうと思つてゐたらしかつたが、案外にも、或る事情より、飛だ所から、二度目の妻――即ち私の繼母を迎へることになつた。

或る朝のことである。父が其の寢室に居て、まだ寢衣さへ脱ぎ棄てゝゐなかつた時のことである、女中が、不思議さうな、驚いたやうな、狼狽したやうな姿をしながら、父の寢室の戸をたゝいて、チモフエイエフ將軍が、訪問されたといふことを告げた。

チモフエイエフ將軍といふのは、第六師團長で、私の

父の屬してゐる軍隊の長官であるのだが、ニコラス一世皇帝の寵臣で、非常に怖ろしい、猛獸のやうな人である。彼れは、其の部下の兵卒が、惡いことをしたと云つて、笞で以つて擲り殺させたこともあるし、部下の士官に過失があつたと云つて、其の官職を褫いで、只の兵士にして、それを西比利亞に流したこともあるし、其の他、いろ／＼と殘酷なことをして、人に怖がられてゐる人であるが、ニコラス一世皇帝は、非常に彼れを重んじ、彼れの云ふことなら、何んでも聽くといふ風であるから、總べての政治は、チモフエイエフ將軍の一言で決定して仕舞ふといふ風であつた。

この怖ろしいチモフエイエフ將軍は、これまで、まだ一度も私の家へ來たことは無かつたが、今朝突然、私の家を訪問して、女中を驚かし、また寢室に居た父を周章させて、一體ドンなことを話しに來たのであらうか。

チモフエイエフ軍將の細君の姪に、エリサベツト、カランヂノー孃といふのがある、これは黑海艦隊の提督



の娘で、丁度古代の希臘の彫刻の側面像のやうな姿をした女であつたが、世間の人は一般にこのカランヂノー孃を美人だと云つて居つた。

偖今日チモフエイエフ將軍が、父を訪問して來たのは、このカランヂノー孃を、父の二度目の妻にせよとのことを勸める爲めで、父は能く考へた上、到頭この縁談を承諾した。さうして、婚禮の儀式は、私のおツ母さんの來た時と同樣に、頗る立派に、虛飾を事として行はれたのである。

『お前達は、何事も能く云ふことを聽かねばなりませんよ』などと、新らしいおツ母さんは、大層な勢ひであつたが、私は心の中で思ふた、『えらい陸軍の大將が、何故自身に、姪の結婚などを世話して歩くのであらうか、さうして、私の新らしいおツ母さんは、實際嫁入仕度を持つて居らぬ。新らしいおツ母さんの財產としては、俗惡な裝飾に充たされた、一個の行李があるだけで、新らしいおツ母さんは、其の行李に腰をかけて、何やら歌を唄つてゐるではないか、』と。

私は父の二度目の婚禮に就いて、如何なる注意も、回想も持つて居らぬ。私は只大きな室が一面に裝飾してあつて、其處に、若い、美しい婦人が、眩しいやうな服裝をして立つて居たのを記憶してゐる。さうして、新らしいおッ母さんは、妙な顏をして、變に言葉に調子をつけて云ふた、「お前はおッ母さんが出來て、嘸嬉しいことであらう、」と、ソコで私は答へた、「私のおッ母さんは天國に居る」と。この正直な答へが、ドレダケ新らしいおッ母さんの氣に障つたか知れぬ。

冬が來た。私の新らしい生涯は始まつた。

私の家は他の人に賣られた。買つた人は、室の裝飾を總て新らしくしたが、私のホントウのおッ母さんの肖像は、周圍に裝飾をつけて、最早人手に渡つた家の壁に箝めこまれてある。それでビュルマン夫人が、熱心に、「この肖像だけは、子供達の爲めに、買ひ戻して保存しておいて貰いたい、其の代り子供達には、これから十分孝行にさせるから、」と云つて、賴んだが、新らしいおッ母さんは、それを承諾しなかつた。親族の人々は、皆「賣つた家は少しも惜しくはないが、私の前のおッ母さんの肖像だけが惜しい」、と云つて居つた。この時から、私の伯父さんや、伯母さんや、祖母さんやと、私の家とが不和になつた。

## ●いもずしの拵方

石井泰次郎

△つくいも(大二箇)皮をむき一分位の厚さに切り、湯鍋に入れ、柔かになる迄、湯煮し、笊に取り上げ、馬尾篩にて、裏こし、鍋に入れ、堅魚煎汁五勺、味淋酒二勺五夕、酢二勺五夕、鹽一匁五分、砂糖八匁、醬油一勺、を加へて、火にかけ、よく〳〵煉りつむるなり、

△細魚大二本、頭を去り腹を取り、よく洗ひ、開きて、骨を去り、(其前に尾、ひれも去る)鹽をふりかけ、酢に浸し置く、△防風を洗ひ、酢を鍋に入れ、火にかけ、煮立ちたる所へ防風を入れ、一寸ゆで、酢にとり置く、

△以上出來上りたる時、布巾を下に敷き、其上に細魚をのせ、(皮の方を下にして)、其上、煉りたるいもを平にのせ、其眞中へ防風を二三本づゝ置き、普通のすしの如く卷き、小口より切りて皿に盛るなり

# 墓場の教訓

月の輪

この二年間は、何故とはなしに、特に『自分』を抑えて、成る可くならば、『自分』の影を薄くし、『自分』の形を曖昧にしようと、努めて居たやうな氣がする。時としては、餘りに自分で『自分』を侮蔑し過ぎたやりかたではないか……とも思つたが、然しそれと共に、何れ程まで『自分』を沒し得るか、何れ程まで『自分』の意志の力を用ひ得るか、といふことも試めしてみたかつたので、或は多少自分で『自分』を弄し過ぎたのかも知れぬ。友人は能く言つて呉れた、「君はもう其の儘老衰して了ふ氣か」と、然し此の老衰せんとするにも似たる二年の間に於てさへ、言ひ更ふれば、能く自分で『自分』を批評しえた間に於てさへ、自分の野性を暴露したことは、曾に一度や二度に、止らなかつたのであつた。」心の平衡を失した時、我が野性の遠慮なく露出せんとする時、直截に言へば、殆ど我が情を制し兼ねた時、



僕は何時も、墓場の教訓を聴かんために、宿を出でゝ、青山の墓場を訪ねて、彼所の墓場を訪ねて、『沈默』と『冷たさ』の敎へを聴た。そして――僕は正直に白狀する――我が露出せんとする野性を制して、『沈默』と『冷たさ』との敎訓を聴きながら、彼の墓標の傍らに倚りし時、世の所謂高き者、豪き者、榮えたる者、乃至は悟れり迷へりと叫べる者の多くは、我が冷笑と侮蔑の裡に葬られて了ふた。――と共に、恐ろしきばかり、寧ろ狂にも近きばかり、我が誇りを覺えながら、最後に又、僕は此の誇れる『自分』を、冷笑し侮蔑せざるをえなかつた。僕は敢て他に向つて、此の冷笑侮蔑の快味をすゝめる自信はない、然し時計の振子の如く、所謂迷悟の間を往來せる人、焙出しの紙の如く、機會もあらば、直ちに『自分』を暴露しようとあせつて居る人、若しくは五管を備へたる通風機の如く、見、聞き、嗅ぎ、或は味へるものを、瞬時を爭うて、吹聴せんとする人が、此の冷笑と侮蔑との眼鏡を通して、如何に滑稽に、氣の毒に、將た狂氣じみて見えるかは、之を實

驗した人でなければ、到底想像さるべきではないと思ふ。

世間の第一の可厭味――と謂はぬまでも、兎に角最も眼に立つて、不思儀に見える特徵は、其の萬事に、そして又始終、躁狂なる事であらう。新しきものに向つて、いゝ、ムヤミに氣をあげる、古きものに對して、イヤに執拗い、利に狂ふ、名にあせる、快樂に渇する、辨解する、愚痴をこぼす、甚だしきに至つては、自分でもない、他人のために、一生を唯斯種の騷ぎに捧げるといふ連中もある、若し彼等をして、一夕彼の墓場の敎訓を聽かしめたならば、さらば、何うであらうか、さはれ、僕は必らずしも、獨り自から、躁狂ならずとして、世人を笑はうといふのではない。實を言へば、僕亦自から常に躁狂なので、其のために、墓場の敎訓を聽きに出かける必要に、迫られるのである、

『沈默』と『冷たさ』とは無限の誇りで、又無限の侮蔑である、尊氏の墓に鞭つて、自から快しとした所謂尊王家に對して、死せる尊氏の『沈默』と『冷たさ』とは、即ち無限の誇りと侮蔑とを、與へて居るではないか。倘且光秀や五右衞門やの墓石が、取り代へても〳〵、破碎れて了ふなぞと言つて今の世までも、彼等に對する憎惡と嫌忌の念を絶たざる人に對して、彼等の『沈默』と『冷たさ』とは、正さに之を氣死せしむるだけの力を有して居るではないか。要之、無抵抗といふことは、一面に於て、屈辱を意味し、隱忍を意味するに似て、他面に於ては、直ちに無限の誇り、無限の昂ぶり、無限の勝利を意味するのである。

僕の所謂墓場の敎訓とは、是れだ。（日記の一節）



# 此頃の草花栽培

また斯樣な題で讀者諸君の御質問に答へること丶致しました。猶は未だお答へせぬのは時節柄後廻しにしたのであります（二葉生）

## （一）スヰートピー

二葉相對して須臾も離れぬといふ比翼連理の面影を見せ五月中頃より咲いて居ります、一名を麝香連理草と呼びますのは、花に匂ひがあつて連理草に似て居るからでせう。全體の眺めは豌豆に能く似たものですからスヰートピースの英名がある譯けですが、花の色には紅、紫、白、絞りなどある上、獨逸の一花戸からは八重種を作り出したとさい申します。

之を栽培するに秋遲く蒔くのであります。操作は唯だ地面を柔かくして種子を下すばかりですが、成るべくは矢張豌豆を植ゑるやうに、四五寸四方に二三粒づつ點々種を蒔くか、鉢に四五粒蒔く方が最もよいのであります、肥料としては灰か油粕のやうなものを少し



與へればよく、手入も別にせんで能く生長します。しかし蔓がだん〳〵伸びて地を匍ふやうになれば支柱を種々の形に立て與ることです。なほ冬季東京では霜除をされると最も安全です。

## （二）カンナ

此月末から殷紅の火を吐くやうな花を見せるのがカンナであります。此の根を其儘に置いても東京以南では大抵枯れませんが、東北地へ行くに隨ふて冬季腐敗し枯死し易くなつて來ます。で之等の地方では床下里芋貯藏の土窖或は之に類似の場所へ、穴底深く藏し、なほ上を蔽ふに藁、籾殼の類を按配することですそうして陽春四月頃出して移植せれたなら、此月末より花を見せるやうに育つは容易です。

## （三）秋草の種子をお蒔きなさい

春彼岸前後といふ文字上の栽培法にばかり拘泥して五月六月になれば駄目だと差扣へるは世間普通ですが予の實驗によりますと、草にもよりますれど、東京の氣候を中心として先月七月上旬までは、何時蒔いても立派に其年花を見せますから。秋咲き草花の種子は之れからでもどし〳〵お蒔きなさい。

# 飲料種々

一、紅茶と言へば、必ず牛乳と砂糖を交せて飲むものゝ様に思ふて居る人があるかも知れぬが、之を他の物と配合しても甚だ趣味のある飲料が出來る。例へば樒柑茶と言つて樒柑を皮のまゝ薄く切り、其一片を茶碗の中に入れ置き、その上から熱き茶を注いで飲むのである。但しレモンの一片を之に代用しても良い。

一、又余が嘗て或ロシア人から聞いたのに、支那茶でも印度茶でも日本茶でも、之を少し薄く出して茶碗に注ぎ、之に何物をも加へず唯二三個の角砂糖を取りて、それを嚙つては茶を飲み嚙つては飲むと云ふ事である。余は屢々之を經驗して見たが、紅茶には牛乳が必要であるとか、日本茶には茶菓子が無ければならぬと言ふに反し、至極簡便にして又結構な仕方であらうと思ふ。

一、燕麥と砂糖と各半ポンドを取りて適宜の器に入れ、少許の微温湯を以て濕して置き、其上から二升ほ



どの沸湯をかけてよく攪和せ、レモンか樒柑の香を少しく着けて暫らく冷却して置き、其上澄を飲む。これは夏ならば更に氷か井戸の内で冷し、冬ならば温めて用ふるのである。

一、草苺を擂鉢にて摺潰し、之と同量の水を加へて布片にて濾し、適宜の砂糖とレモン精を加へて味をつける。

一、蕃茄の良く熟したるものでも、前と同じ方法によつて、甚だ結構な飲料が出來る。

一、林檎の酸味強きものを取りて皮をむき、四つに割りて心を去り、少しの水を入れて軟かくなるまで之を煮、裏濾にかけて後、林檎と砂糖各半斤水一升の割合で再び鍋に入れて一寸煮立たせ、之を冷却して置いて飲めば至極結構である。

一、生薑をすり卸して、其汁を搾つたもの二大匙へ水一升を加へ、砂糖と酒石酸とレモン精で味をつけ、一度沸騰させて後冷却して置けば、夏期の飲料として甚適當なものが出來る。（森亭記）

# 大堀若太郎の朝飯

堺利彦譯

本號の前半には大ぶん八釜しい理窟が並んだので、「婦人新論」は一回だけ遠慮する事とし、「故山の情話」も暫くお預りとして置いて、何ぞ外に輕燒煎餅の樣なものはないかと思ひながら、書齋の中を見廻すと、フト本箱の隅から古い薄ッぺらな英文の小冊子が斜に顏を出して居るのが目についた。ハテあれは何であつたかと引出して見るに、「ジャック、アボットの朝飯」(Jack Abbott's Breckfast) と題したレイハント (Leigh Hunt) の滑稽話である。ア丶是こそホンに誂向の輕燒煎餅だと、直ぐに其の荒ましを譯して見た。讀者諸君、マア一つ召しあがつて見て下さい。決して胸には持ちませぬ。

（一）

「今朝はマアどんな朝飯を食ふのだらう」と、大堀若太郎は道々考へた。「あゝ大ぶん腹が減つた。此樣子



ぢやア幾つお代りをするか知れない。けれど構やしない、百濟先生は善い人だもの、幾ら我儘を云つても構やしない。何しろ是やモウ少し時刻が後れた樣だ。ソップが冷えてパンが燒直しになつてや仕ないか知らん。マアい丶や、此位腹がすいてりや何でも斯でもマズイものなしだから。」

大堀若太郎は善良な青年で、今日恩師百濟先生から朝飯に招かれて、ヘンドン町から二里あまりの道をテク／＼あるきで來たのである。

扨いよ／＼若太郎は百濟先生の家に着いた。戸を叩くと石濟先生自ら出て來た。先生は痩せた、皺だらけの、髮も髭も眞白い、極めて柔和な人である。先生は無頓着な學者の生涯を送つて來て、六十五歳の今日まで獨身で、丁度ゴールドスミスから其の天才を拔去つて其の氣の善い所だけ殘した樣な人である。おまけに耳が遠くて近眼で、六時間前の話はもうスッカリ忘れて居るといふほど、物覺えが惡くなつて居る。

「先生お早う御座います、ツイどうも遲くなりまし

て」と若太郎は挨拶したが、先生は近眼の瞼に皺をよせて若太郎をケバ〱と打眺めながら「誰方かのう。甚だ失禮ぢやがお前は誰方かのう」

「先生、私がお分りになりませんか。大堀若太郎です。先日途中でお目にかゝつて、そして今日お招き下すつたので……」

「おう〱大堀か、大堀若之助か、お前を見忘れるとはのう。サア〱まあおはいり」

「先生若之助では御座いません、若太郎です」

「ウンそうか〱。お前は近頃大變に肥つたのう。マア丈夫で何より結構だ。おつかさんは相變らず御達者か」

「ハイお陰で至極達者にして居ります。（と次の室の食卓を見やりながら）先生今日はどうもツイ遲くなりまして相濟みませんでした。嘸お待ち下さつたでせう。どうぞ何もお構ひ下さいますな。パンでも何でも私が自分で切りますから。丁度昔しの樣に先生の側で我儘をしながら、パンを頬張つて本でも讀むのが一番の愉快です」

「おう若太郎、お前は飯朝を食べに來たのか。そうか。それは善く來た。どれ〱、待ちなさい。今朝は例の婆さんが來て呉れないものだからのう。ナニ今に私が拵へてやるよ。」

若太郎は微笑みながら嘆息した。百濟先生いゝ氣なものだ。人を招待して置いて忘れてしまつて居る。「先生どうも恐れ入りますが、實は其のヘンドン町から歩いて參りましたので、實は其の大變に空腹になつて居りますので」

「ハテ〱そうか、ヘンドン町から歩いて來たかの、それは大變だ。さあ〱こゝにコーヒーがある。茶碗と匕とはソレ其處にあるだらう。」

若太郎は恐縮しながら茶碗と匕など取揃へて、どんなコーヒーかと注いで見る。

すると先生は當惑の體で「や是は困つたミルクがない。猫が嘗めてしまつてのう。婆さんは來て呉れないし、是は困つた。ナニよし〱私がチヨツト行つて取

つて來てやる。」

「ア、先生、どうぞお構ひ下さいますな。私はミルクなんか入りません。私は平生からよくミルクなしでやつて居ります」

是は全くの嘘で、若太郎はミルクなしのコーヒーは大の嫌であるのだけれど、老先生の氣を安めようと思つて、斯う云つて見たのである。

「そうか、それはマア善かつた。私には何うもミルクなしのコーヒーは飲めないがのう。お前はミルクなしでも構はないとは、それはマア仕合せだつた。イヤ然し是は困つた、砂糖が無い。ナニよし／＼、私がチヨツト行つて取つて來る。すぐそこのフリート町まで行けばあるのだ。それツノそこの新聞の下に私の帽子があるから……」

「ア、先生、どうぞお構い下さいますな。私は砂糖なんか入りません」と若太郎は椅子から飛びあがつて先生を引止めながら「私は平生から餘り砂糖を好みません」



「でも萬皿砂糖が無くちやア……」

「イヤ決して、決して。先生どうぞお構ひ下さいますな。私には是で結構ですから。御覧下さい、こんなに戴いて居りますから」

若太郎はミルクなし砂糖なしのコーヒーをガブ／＼と飲みほした。それでも先生が猶ほ氣の毒そうにして居るので、若太郎は更に「先生ほんとにどうぞ御心配下さいますな。先生がそんなにして下さいますと、私はモウ何を戴く氣も致しません。私はパンさへあれば結構で御座います昔から善くパンばかり嚙つて本を讀んだ事を先生も覺えて御居でゝ御座いませう」

「ウンなるほど、お前は總てが質素だからのう。ホントにお前は感心だ。さあ／＼パンは此處にある。イヤ是は又困つたぞ。バタがない、バタがない」

「先生、バタですか」と若太郎はサモ嘲ける樣に「私バタなんぞ食べた事がありません。どうぞ先生お構ひ下さいますな。それに先生。私は今日少し急いで居りますので、モウ是で失禮いたします。イヤ全く、モウ

澤山戴きました。丁度今日、春木辨護士の處に行く筈ですから……」

若太郎は心の中で考へた。迚も此處では腹をふくらす譯に行かぬ。早く此處を出て近處のコーヒー店に行つて、此の空腹に一パイつめこみたいものだ。そこで若太郎は色々にして老先生を説きふせ、其代り又暫く、其の空腹を我慢して、先生の今讀みかけて居た歴史の本の講釋を聽聞して後、ヤットの事で外に出た

（二）

大堀若太郎は百濟先生の家を出ると其儘、虎の如くフリート町に走つて行つて、一番近くのコーヒー店に飛びこんだ。

『入らッしやい!!』

『何でもいゝから朝飯を早く』

『玉子の半熟に燒パンでも差上げませうか』

『よろしい、結構』

『ハムは如何さま』

『ハムよろしい、結構々々そして、早く賴むよ』



『鳥のコールドミートは如何さま』

『それもよろしい、早く賴むよ』

『アンチョビーは如何さま』

『それもよろしい……いやアンチョビーは嫌いだ。外の物なら何でも善いから早く持つて來い。何んしろ腹がすいて仕樣がない』

『畏まりました、すぐに持つて參ります』

若太郎は先づ是で生きあがつた、『コーヒー店は實に便利な處だ。何でも好な物が直ぐに出來るんだもの。それに新聞は澤山あるし。ウム成程、「强盜、人を殺す」「夫婦の情死」「貧の首つり」「電車の怪我」實に恐ろしい事ばかりあるものだ。あゝ何しろ腹がすいて堪らない。今朝はマアどんな朝飯を食ふのだらう。オイ〱給仕〱々々』『ヘーイ只今すぐで御座います』

やがて注文の品々がテーブルの上に並べられた。燒パンと玉子とハムとコールドミートと……

『オイ〱、パンを今一皿燒いて吳れ』

『ヘーイ、畏りました』

若太郎は新聞を二つに折つて左の手に持た。長い雜誌に目をつけて、それを讀みながら徐ろにパンを食ふ積りである。そして今や其パンの一片を摘まんとした時、驚くべし、窓のガラス越に百濟先生の姿が見えた。百濟先生は新聞を見に來たのである。

若太郎は實に驚いた。丁度先生が此コーヒー店にやつて來ようとは。生憎にも程がある。若太郎は此處で先生と顏を合はせて、笑つて濟ますほどに面の皮が厚くなつて居らぬ。そこで先生の近眼を幸ひに、二つ折の新聞を我顏の正面に押しあてる樣にして、息を殺して其影に隱れて居た。先生は勿論、何の氣もつかず、スツト向ふのテーブルの前に座つた。若太郎は先生の横を向いた折を見濟まして、コソ〳〵と其コーヒー店を逃げだした。

給仕の男は驚いて若太郎の跡を見送つたが、若太郎は又直ぐ筋向ふのコーヒー店に飛びこんだ。怪しんで其處らを見まはしたが別に紛失物も無い。多分、急に何か思ひだして、あの店に居る友達に話をしに行つた



のだらう、あんなソソツカシげな人だからと考へた。

若太郎は百濟先生にも見つけられず、幸いに彼處の料理にまだ一箸も手をつけなかつたので、マア善かつたと喜びながら、第二のコーヒー店で再び前同樣の注文を爲し、前同樣のテーブルに座を占めて、前同樣に新聞など取りあげた。「もう此處なら大丈夫だ。百濟先生まさか二ところで新聞を見やしまい。あゝ腹がすいた、腹がすいた、今朝はマア一體どんな朝飯を食ふのだらう」

やがて料理は前同樣に並べられた。燒パン、玉子、ハム、其外。若太郎は今こそいよ〳〵其のパンの一片を手に取らうとして、フト入口の方に目をやつた。驚くべし、前のコーヒー店の給仕がヒヨイと頭を出して若太郎をジロツと見て、直ぐ又ヒヨイと引込んでしまつた。若太郎は忽ちパンの手を引込めて、又ツーイと逃げだして第三のコーヒー店に飛びこんだ。

此處には客が一パイあつたので、若太郎は暫しアチコチ見まはした末、漸く又前の樣な席を占めた。そし

て又燒パン、玉子、ハムなどが並べられた。『やれ〱、是でヤツト朝飯にありついた。何が何だつて此上モウ我慢がなりやしない』若太郎は今度こそいよ〱其パンの一片に手をつけた。

此時、三對の目が帳場の物蔭から若太郎を見つめて居た。それは第一のコーヒー店の給仕と、第二のコーヒー店の給仕と、第三のコーヒー店の主人とであつた。三人申しあはせて此の不思議な客の張番をして居るのである。

第一のコーヒー店の給仕『何といふ妙な奴だらう。二度も三度もコーヒー店に飛込んで、食事の注文をしては一口も食はずに飛出してしまやがる。そしてキヨロ〱するのでなく、いやに落ちついて新聞なんか見てるぢやねいか』

第二のコーヒー店の給仕『そうだ！いやに濟ましてやがるぜ。己の店に來た時もあの通りだつた』

第三のコーヒー店の主人『其の濟ましてるがアテにならねいよ。隨分よく濟ました奴に匙だの皿だのシテ



やられた覺があるぢやねえか。マア一口だけ食はせて置いて、それからフンづかまへて呉れようぢやねえか』

處が若太郎、今度も又其一口を食はない。何と思つたか、不意に妙な顏をして、一旦取りあげた其パンの一片をジツと又皿に戻した。

『オヤ〱又止めたぜ。一口食やがるといゝになア。』『何だか今度はキヨロ〱してるぜ』『オヤ、ポツケツトに手を入れたぢやねえか』『何ぞ盜みやがつたかな』『オイ〱入口を用心しねえ』『逃がしちや大變だ』

若太郎は憮然として燒パンを眺めた。そして又ポツケツトに手を入れた。暫く溜息をついて考へて居たが、フイと又立上つて前と同樣に逃げだした。

（三）

處が今度は若太郎、入口に於いて彼の三國同盟の手に取おさへられた。

『ポツケツトを改めろ、ポツケツトを改めろ』『此の野郎、三べんも朝飯を注文しやがつて、そして一ぺんも食やしねえで』『朝飯よりか匙が目あてなんだらう』

可愛そうに若太郎は體中改められたが、六かしい字の書いた手帳が一冊とハンケチが一つとより外に何んにもない。

『此奴はフランス人だ』『一文なしのカラッケツだ』『太い野郎だ』三人が三様に罵つた。

『君等は勘違いをしてるのだ。成程、君等が不思議に思ふのも無理はないが』と若太郎が辨解しかゝると、第三の主人は怒鳴りつけて『畜生、何をぬかしやがる此間盗んだ匙をどうしやがつたんだ』

『ナニ匙、匙をどうしたと云ふのだ。我輩はまだ何も手につけやしないのぢやないか』

此時、周圍には早や大勢の人がたかつて居る。『此奴ア三べん朝飯を注文しやがつて、一ぺんも食やしねえんだ』と第三の主人が又怒鳴つて大勢に披露した。大勢の中から、サモ勿體ぶつた眼鏡の紳士が現はれて、『朝飯を三べんとはおかしいぢやないか。ナゼ又そんなに出したんだ』『イヤ旦那、三個處で三べんなんです。此男の處で一ぺん、此男の處で一ぺん、それから



私の處で一ぺん。それで今フンづかまへて改めたんですが、ポッケットの中にや一文だつて持つてやしません』

『サアそれだから、それだからなんだ』と若太郎は又辨解しはじめた。

『何がそれだからだ』と眼鏡の紳士が問糺した。

『何がと云つて、實は其の、先つきフイと氣が付いたのですか、今朝家を出るとき急いだものですから、錢入を忘れて來て……』

群集は『ハヽヽ』『ハヽヽ』と笑ひだした。第三の主人はいよ／＼荒立つて『そんな事で言譯が立つもんかい。それぢや前の二度はどうしたんだ。嘘も大がいに吐きやがれ』と、若太郎の襟首をつかまへてコヅきまはす。それに巡回の巡査が來あはせる。『ソレおまはりさんだ、おまはりさんだ。おまはりさんに渡すが一番だ』といふので、若太郎は可愛そうに、とう／＼交番所に引かれてしまつた。

交番所で若太郎は據んどころなく事の一部始終を物

語つた。巡査もそれを聞いて見ると別に疑ふ處はない。百濟先生の事も知つて居る。若太郎の手帳を見ても其の然るべき紳士たる事が分つて居る。巡査は遂に若太郎を放免した。コーヒー店の主人と給仕等とは、無駄手間を費したと云つて、ブツ〳〵こぼしながら歸つて行つた。

（四）

若太郎はペコ〳〵の腹を抱えて交番所を出た。錢は一文もなし、どうする事も出來ぬ。然し兎にかく辨護士の處に行かうと決心した。

其の辨護士といふのは、まだ一度も會つた事はないが、死んだ父の親友であるので、構ふものか、そこに行つて御馳走になる事にした。『あゝ〳〵今朝はマアどんな朝飯を食ふのだらう』

若太郎は漸くにして春木辨護士の家に着いた。あゝ此の大きな家の立派な食堂で、春木夫人の手に依つて、暖かい朝飯の御馳走になる事かと、若太郎早や口の中を濕ほしながら内に入ると、此處は春木辨護士の法律



事務所で、書生や事務員が倚子を並べて詰めて居るばかり、若太郎が豫想した様な家庭の趣きは少しも無い。それに春木先生は今裁判所に行つて不在との事。奥さんはと聞けば、先生には奥さんは無いとの事。奥さんでも居るならば、よしや會つた事は無いにしても、事情を打あけて御馳走にならうものを、此の殺風景な書生連ばかりを相手にして、朝飯の所望もならず若太郎に弱りきつて、先生は何時頃お歸りになるかと聞けば、夕方で無くてはお歸りにならぬ、然し晝飯は裁判所の側の寶亭であがるに極つて居るとの事。

若太郎は朝飯々々と思つて居るが、時はもう彼是晝になつて居る、して見れば其の寶亭に春木辨護士を尋ねるより外はない。又若太郎は又空腹を抱へてテク〳〵あるきで寶亭までたどりついた。處が春木辨護士はまだ來て居らぬ。

是が若し世なれた人であるならば、春木辨護士はまだ來て居ずとも、何なりと注文して、それを食ひながら待つて居れば善いのであるが、若太郎毎度の失敗に

懲々して、今度はモウ何んにも注文せず、給仕が來て色々勸めるのを拒絶して、只だ新聞ばかり見てポンヤリト待つて居る。『あゝ〱今日はマアどんな朝飯を食ふのだらう』

待つこと一時間にして春木辨護士は漸くやつて來た。春木辨護士は機嫌のよい老紳士で、若太郎を一目見ると直ぐに心易げに打解けて、『おうそうか、大堀の息子さんか、ハ、、、、お父さんソックリだ』

春木辨護士は若太郎を一室に導いて、直ぐに二人前の料理を注文した若太郎は此あしらひに涙の出るほど嬉しくなつて、今朝程からの一部始終を在體に物語つた。機嫌のよい辨護士は吹出して笑ひこけた。そして給仕を呼立て、『早く、早く』と急がせた。

やがて料理は前に並んだ。今や正に午後一時、若太郎は始めて玆に朝飯に在りついた。するとそこに又給仕がやつて來て『百濟先生がお出になりました』と案内する。若太郎は又ギヨツとした。

若太郎の父と春木辨護士と百濟先生とは皆な親友同



志であつた。然し百濟先生は今日は只だ春木辨護士に會ひに來たのぢやない。

『おう若之助、イヤ若太郎、お前は此處に居たか。ヤレ〱安心した。お前が朝飯を三べん注文して、そして食逃をしたと云ふので、ハ、、、、滅相もない事を云ふものだ。それで私は春木に相談しようと思つて來たのだが、マア善かつた、お前が斯うして春木と一所に晝飯を食べて居るのを見ればモウ安心だ。』と百濟先生頻りに喜んで居る。

百濟先生は是を晝飯と思つて居るのかと思へば、若太郎はおかしくもあり、極りが惡くもあり、何しろ今空腹に詰めこんで居るので、祿々返事をする事も出來ぬ。すると春木辨護士が救に來て『イヤ百濟君、安心してくれ、何でもないのだ。實はね、此の大堀君が先刻我輩を尋ねて來て、丁度我輩がまだ朝飯をやつて居なかつたので、それでは一所に朝飯を食ひながらユル〱話をしようからと、大堀君を先にやつて、あのコーヒー店で注文をして置いて貰つたのだ。所が我輩が

少し遲かつたので、大堀君は我輩を見に表口まで出て來る、丁度その時我輩は其筋向ひのコーヒー店の前で、つまらない事から巡査と言ひ爭ひをして居る、大堀君は我輩を見て飛んで來る、彼是する中、大勢の人だかりがすると云ふ樣な譯で、それでソレ大堀が食逃をしたと斯う話が間違つたのだ。朝飯が三べんぢやアない、朝飯が二人前なのだ。話といふものは何時でもそんなに間違ふものだ。ハツハヽヽヽヽ』

どうせ。明日になれば、百濟先生は何もかも忘れてしまふのだからと、春木辨護士は出鱈目を話して聞かせる。それでも百濟先生は『そうか、そうか』と得心して、『ヤレ〱マア安心した。どうも世間は嘘ばかり云ふので困る』

大堀若太郎の朝飯の話は是でお仕舞。

## 笑と衛生

河越眞世禮濟

能く笑ふ人の健康なるは、啻に健康なるが故に能く笑ふと云ふ一因に止まらずして、笑ふが故に健康となると云ふ一因の存する事、生理的心理的より明瞭なる事實である。



笑が人の全身に及ぼす効果は下半身よりは上半身に多く、又主として外部は顏面に、内部は心臟肺臟に大なる善良なる影響を與ふるもので、實に笑は人工呼吸を行ふよりも更に大なる効果がある。是を以て貧血症又顏面の血色美ならざる者は、毎日故意に笑を行へば衞生上最も善きのみならず、彼の神經痛を醫する効がある。又常に悲哀に沈む人には精神上に少からざる効果がある。

而して其人工的笑は如何にして行ふべきかと云ふに、子供のためには學校にて行はゞ、遊戲の中に多くの笑を混ずべく、大人は此の如き好機會なきを以て故意に行ふか、或は勝負的遊戲の賞罰として行ふより外に善き方法がない。殊に運動の自由を有せざる獄裡の人には笑は最も良好なる衞生法である。

伯林の醫士ハンケ氏は、「笑ふ事」に就て斯う云ふ事を云ふて居る。「笑ふ門には福來る」と云ふのは日本の諺であるが、我獨逸にも是に類した「笑へば肥る」と云ふ古諺がある是等は生理上大に理由ある事で決して一槪に貶す事は出來ぬ。身體の强壯な人は能く笑つて如何にも愉快さうに見ゑ、虛弱な者は笑ふ場合が甚だ少いと云ふことは一寸觀察しても直ぐ判る。然し其は强壯なるが故に笑ふのでなく、能く笑ふが故に强壯になるのである。「笑ふ」と云ふ事は實に食慾を進め血液の循環を能くし消化を助け總じて營養の上に少からぬ効がある、其結果身體を强壯にし精神を健全にし健康なる身體を作るのである。

「笑ひ」から直接に及ぼす生理上の結果も亦大なるもので、第一其作用によつて顏、頸、胸、腹等に於ける筋肉は皆運動を起し、結局心臟、肺、肺經其他の組織を良好ならしむるのである。大口を開いて笑ふときには肺が非常に擴張し、其れが爲に肺の中に滯つて居る惡い空氣が皆出て新鮮な空氣と入れ替り、血液の中からは不純の空氣を追ひ出して純淸なるものと替るのである。又橫膈膜は呼吸の烈しき爲に大に上下に運動し、肝臟、胃、腸其の他腹部にある諸機官の機能を活潑にする効がある。斯樣な譯で笑ふ事が吾々人間に與へる利益は非常なものであるから、身體を大切と思ふ人は勉めて大いに笑ふがよい。

# 酷遇されたるゴルキー

（社會制裁とは何ぞや）

金子喜一

▲本誌の前半を編輯し終りたる後、金子君より此原稿が到着した。重複の嫌いもあるが、前の文章の意味を更に十分に貫徹させる爲に、茲に又載せる事とした。

△マキシム・ゴルキーが一家の私事のためー曰ふのは前妻との結婚が寧ろ不幸の結婚で、今の一女優たりし婦人を妻とするに當り、先妻との關係を全く絶つ能はずして今日に至り、而して彼がこの米國に來るや、淺薄にしてさわぎ易き國民は直に口を揃へて、ゴルキーの不道德を責め、ホテルはその止宿を拒絶し、市民はその交通を斷絶して了つた、勿論このホテルの主人と曰ひ市民と曰ふも、所謂紳士閥のそれらで、自ら稱して德行家となす所の僞善家連である。

△勿論ゴルキーの場合は甚だデリケートな場合で、一概に總括して論評することは出來ぬと思ふ。一露國通の曰ふ所に從へば、元來露西亞に於ては離婚は極めて



面倒なるもので、舊教徒以外の人が離婚を承認さるるには、少なからぬ手數を要することで、時としては全く離婚は不可能であるとのことである、ゴルキーは勿論、後妻と生活を共にするに至りし前、離婚の許可を試みたのであるが、思ふ如く事がはこばなんだのだ。

△亞米利加人がゴルキーを遇するの態度をみて、輕薄なる僞善家は揚言して曰く「流石は公德の發達している米國である、ゴルキーの天才を以てしても終に彼が私生涯の汚點は許さうとしない、」と。なるほど一寸みれば至極尤もらしい言ではあるが、その實少しの根底もない。抑も公德であり、社會制裁であり、世人の想像するが如く、數學的に働くものではない、ゴルキーが米人に依りて取扱はれた事例は、時流道德から見て、よしんば、公平であるとしても、米國の社會制裁は公平ではない。

△今日、米國に於ける富豪紳士社會の不道德と曰ふものは、それは記述に堪へぬ者のみである、只だに重婚のみにあらざる也、三重婚あり、四重婚あり、姦通あ

り、公然の密婦密夫あり、而して社會の制裁は何所にありや、宗教の威嚴は何所にありや、公德とは何を指して曰ふものなりや、實にチンプンカンである、而して唯だ一人のゴルキーは－憐むべき外客としてのゴルキーは、不德にもあらぬ、神聖の愛よりして、止むを得ざる離婚の不幸をみて、新たなる夫婦の關係を作りしのみであるにも係はらず、公言して重婚の不德義を難じ、彼公德を以て彼を目するの米國民は、抑も何等の僞善者なるぞ。

△ゴルキーの場合は恰もリッチヤード・ワグナー、シエリー、ジョージ・イリオット、ジョン、スチワード・ミル、チヨーヂ、サン等の場合の如く、世にも不幸なる場合である、ゴルキーの先妻はゴルキーの理想を了解せざるのみならず、寧ろゴルキーの政治思想に反對して、所詮彼をして奮鬪の生涯を送らしむることを拒むだのである。で彼は米人の待遇甚しく酷なるをみて絕叫して曰ふた「予は予獨り起つ時最も強し」と、眞に彼の心事を推すべきであるまいか。



△兎もかくゴルキーの先妻はゴルキーと分れて他に嫁し、ゴルキーも又、彼を充分了解し寧ろ崇拜しているほどの一女優アンドレーヱアと婚したのである。凡そ世界の天才とも曰はるる人物の生涯を見來れば、何れもこの悲劇に逢遇している。勿論ゲーテ、バイロン、伊藤博文、下田歌子の場合の如きは、全くコンヴエンショナル道德を離れても、許すべからざる不德漢である、吾人は天才の名のもとに、若しくば彼等があげ得たる事功の名のもとに、その不德義を許容し去ることの餘りに寬大なるを信ぜんとする者である。

△而もワダナーの如き場合、シエリー、イリオット、ゴルキーの如き場合は、決して不潔なる女婬家伊藤博文の場合と比較し得るものでない。――序でながら曰ふて置く、野口米次郎は米國の一雜誌ナショナル、マガジンに、近日伊藤博文を辯護して曰く「伊藤侯は婦人に對して最も忠實なる人物也」と、予はこの一節をみて、實に野口は日本の女性を侮辱したるものと思ふ、予は世間徒らに自己の虚名を賣らんとして妄りに權門

に媚び、勢家に阿ねるの俗輩多く、而して又その俗輩の人物の眞僞を見わくるの明なくして、所謂時流に從ふて、社會道德であるの、人才であるの、德行であるのと喋々する愚物をあはれむものである。世に最もあはれむべきものは『考へのない衆愚』、『腦のない動物』である。

△アメリカの社會がゴルキーに無暗矢鱈に喰つてかゝつたのは、矢張考へのない、頭のない新聞記者の俗論にうかされたからである、シカゴの一商人マーシャルフヒールドの死んだ時も、米國新聞は口を揃へて、マーシャルフヒールドは模範的商人であるの、人民を苦しめないで作つた財產は、マーシャルフヒールドのそれであるのと喋々した、而も彼等は眞理を語つては居ない、彼等は自ら考へないで、一犬虛に吠へて萬犬これに從ふたものである。

△極めて冷靜にかゝる問題を考へてみれば、世の中の道德とか、不德とか、曰ふものは、明白に分つてくる、社會制裁は常に常識の土臺の上に起つては居ぬと曰ふ



ことも分つてくる、善く個人と個人、それから社會との關係を見分けてくれば、この混雜しているやうな社會倫理も、明々白々の問題となつて了ふ。只だ世の俗輩――自ら考へない俗輩は、つまらない、意味のない信條とか、道德とかを標準として考へるから、誤解が生じてくるのである、事實を取りのぞけて考へたとて公平な結論は得られるものでない、紛々たるゴルキーの批評も事實の上から觀察を下さぬからの誤りであると思ふ。

△社會制裁と曰ふものは飽くまで數學的に動きはせぬ、見られよ日本に於ける故福地源一郎、今の德富猪一郎は如何、彼等は社會制裁の極めて弱い國と自稱する日本で、社會的最後をとげた人物である、英國に於てもパーチルは女性間の不評判より社會的自殺をせねばならぬ間に、ジョーヂ、エリオットは文士として、ともかく非常なる責罰なしに一生を過し得ではないか。

△然り、社會制裁なるものほど不紀律に而して不公平に働く者はない、この極めて盲目にして、非數學的な

る社會制裁を取り來りて、甲の社會は公德が進むでいるの、乙の社會は社會制裁力が強いのと曰ふは實にとりとめなき評論である。ゴルキーの場合を以て米國社會の公德――紳士道德が――進歩しているとみた人は、現時の富豪紳士間の不道德を制裁するの社會制裁力を何所に見たりや、予は眞に知りたく思ふのである。

△社會制裁は一種の義勇軍のやふなもので、兵法も知らず、規律もわきまへず、地理も察せず、盲目矢鱈にうつてかゝる彈である、あるひはゴルキーに的り、あるひはパーチルに的り、あるひは德富猪一郎に的り、あるひは福地源一郎に的ると雖も彼等はエリオットを見殘し、ワグナーを見殘し、ゲーテを見殘し、而して更らに甚しきに至りてはロックフエラーを見殘し、公然イリー鐵道會社を通じて盜賊の行爲を敢てせしゼ、グールドを見殘し、伊藤博文を見殘し、下田歌子を見殘して居るではないか。

△予は世間謂ふ所の公德なるものや、社會制裁なるもの、頗る要領を得ぬものであることを感せざるを得ぬ、予は一人のゴルキーを辯護するのではない、唯だ世間徒らに漠然として、社會制裁を喋々するの徒に向つて少しく考へて貰ひたいのだ。殊に卑近なる米國の社會道德を稱揚するの徒に再考を要求するのだ。

△佛國の一記者ガスタープ、カアーンは論じて曰へらく、「米國に於けるこの似而非道德は必竟婦人跋扈の結果のみ、米國婦人は自己が不德を働きながらも、なほ新聞雜誌の批評の自己が上にあらざらんことを要求す、……惟ふにゴルキーを歡迎しつゝある彼等は、ゴルキーの著述の一頁をも讀まざるの徒ならむ、ゴルキーは唯だに所謂現時の結婚なるものを罵倒するのみならず、彼は自由戀愛を公然主張するの革命家也」と。

△社會制裁の人に於けるは、文典の文章家に於けるやうな者である、餘りに文典に拘泥すれば眞の文章は死でしまふ、活きた文章を文典律で批評すれば、文の妙味は分らなくなつてしまふ、社會制裁は盲目なもの、文典は規則立つたもの、文章は活きたもの、人間は進歩してゆくもの。

（四月二十六日記）

# 記者雜談

◎家庭雜誌廣告のチラシ　先頃から本誌の廣告のチラシを作つて、社中の者の外出の序に東京市中に配つたり、或は同情ある讀者諸君の厚意に依賴して諸地方に配つたりして居るが、其チラシの面には左の如き文字を印刷した。

我々は現今の家族制度に反對す
我々は現今の結婚制度に反對す
我々は現今の賢母良妻主義に反對す
我々は婦人の經濟的平等を主張す
我々は將來の自由なる男女關係を想望す
我々は將來の社會的なる家庭生活を理想とす

此六項は實に家庭雜誌の精神で、此精神は常に本誌の到る處に發現し、若しくは潜伏して居るのである。本誌の讀者諸君は別に說明を加へずとも、善く其意味を理解して下さる筈である。然し世間の溫良なる男女は、前の方の三項丈を見て、先づビツクリしてしまふ。家



族制度に反對すれば不孝者になる、結婚制度に反對すれば野合になる、賢母良妻主義に反對すればハネカヘリの、おテンバの、男とも女とも知れぬ者になる、と斯う思ふて恐れて居る。恐るゝ者は恐れよ。而して後に眞理を悟れ。我々はお孃樣や奧樣の御機嫌を伺ふ爲に書くのでは無い。

◎家庭に於ける電氣と瓦斯　家庭に電氣を引くとか瓦斯を燈すとか云へばチヨツト貴族的に聞えるが、瓦斯電氣も此頃では取付費を會社で持つ事になつたので、別に大した費用が掛る譯ではない。水道を引くのが便利で經濟であるならば、瓦斯と電氣もそれと同じ筈である。由分社にも今度瓦斯を引く事にした。臺所の七リンやヘツツイの設備に十五圓ばかり掛るが、是は十五個月賦で拂ふのだから、我々にも餘り苦にならない。それから各室のランプ（總計五個）の費用が七八圓かゝる。是を一時に拂ふのが大ぶん苦しいけれどマア奮發する事にした。それから今後每月の瓦斯代（燈火用及び炊事用共）はメートルの計算に依つて仕拂ふので、

それは是までの石油と薪炭との費用と違はないと云ふ事である。まだ試して見ないから分らぬが、或人の説に依れば却て瓦斯の方が安いとも云ふ。金錢の經濟上の事は是丈であるが、扱いよく〳〵瓦斯が點れる事になつたら、臺所掛の人の手の省ける事は何程であらう。炭、薪、石油の世話は一切入らず、ランプ掃除のうるさゝは無くなり、火をたきつけるの、火をおこすのと云ふ事は總て無くなり、消壺も入らず、天窓も入らず、炭取も入らず、臺所の事務は殆んど半減してしまふであらう。さうすれば其の半減せられた勞力を、更に他の有益な方面に向ける事が出來るので、其人々の爲に、一家の爲に幾分の幸福を増すに違ひない。そは何も由分社の家内の事のみに就て考へるのではない。我々は社會全體に就て常に此樣な考へを持つて居るのである。前々號かにあつた中尾君の『臺所廢止論』など參照を乞ふ。

◎携帶電燈　本誌の廣告に『携帶電燈』といふ物がある。其賣擴めをやつて居る人が記者の舊友であるので記者は其一柄を贈られた。それは一尺ばかりの竹の筒の樣なもので、其一端に電燈が仕掛けてある。そして其筒の中程にある釦をチヨツと押せば、忽ちパツト火が點れる。そは文明的の手燭或は提灯と云ふべきもので、實に便利重寶なものだと思ふ。尤も價が安くないので普通平民の使用には適せぬが、兎にかく今の世にはこんな便利重寶な物が出來て居るのだ。然るに一方には、まだ隨分種油の丸行燈を使つて居る田舍もあるであらう。それを思へば實に情なくなる。世が進んだ〳〵と云ふが、それは金のある人にばかり進んだので、貧乏人の爲には千年二千年の昔も同じ事である。世の貧乏人たる者は何故に奮發して、他の富者と同じく、此の文明の恩澤に浴する事を勉めないのか。考へれば考へるほど齒がゆくてたまらぬ。

◎西村洛山君より　『此月はとう〳〵何も出來ませんでした。此間、弘前の一讀者より『三つの生活』の最後の分を載せよとの催促がありましたから、七月分にはそれを少し書かせて戴きます』

◎次號豫定記事　の廣告をして置いて、何時も兎かく實行が出來ませぬから、今度はモウ何も書かずに置きます。然し『故山』の情話の『下』も書くつもりです、『婦人所論』の續稿は固より書きます。中尾君及び中野君の文章も必ず載る筈です。其外、珍らしい善い材料が色々ある筈です。

# 家庭と養蠶

丹羽四郎

養蠶と云ふことは、勿論主として一家の經濟上の關係から行はれるものでありますが、此の經濟上の關係を取り除いてしまつても、家庭と養蠶とはその間に多くの趣味のある關係を殘して居るのであります、今それを數へて見ると、（一）觀察を精密にすること、（二 注意を周到にすること、（三）秩序を守るべき教訓を得ること、（四）動物に對する慈愛心を增すこと、（五）勞働の趣味を增すこと、（六）新らしき談話の問題を作ること、（七）自然界に關する智識を增すこと。

蠶ばかりでなく、すべて生物は皆成長して行くのでありますから、日々之を見て居ると、昨日は色が變つたとか、今日はこれ丈け大きくなつたとか、食物を採るにはドウして採るとか、歩く時の有樣はドウであるとか、その外體のドノ部分に頭があつて、足はどの邊にあるとか云ふやうなことが、何時とはなしに次第に氣が付いて來て、次には口はドンナ形をし眼はどこにあるとか、前にある足と、後にある足とは形が違ふから、用ひ方も違ふだらうとか云ふやうな、精しい觀察が次第々々に遂げられて來る、これが推し及ぼして總ての物に對し精しい觀察をするやうになる、觀察が精密になりますから、自然事物によく注意をするやうになります、又蠶は一生涯の中に四度眠り四度起きて、決して順序を亂しませぬ、昔から此のことは注意されて居たものと見えて、荀子などにも蠶の生活の規則正しいことを書いて、蠶理と云つて居ります、そして此の蠶が眠る時に眠らないで居たり、起きてもハキハキ桑を食べないやうなものは皆中途に病で死ぬのであります、これらは實に秩序を守ることが如何に必要であるかを示す、生きた教訓ではありませんか、それから日々養つて行く中には、初めはイモムシのやうな嫌な蟲だと思つた人も、靜かに桑を食べて、別に倒ひ散るでもなく一つ所に居るのを見ては、自然に愛情が起り、今迄犬や猫丈を愛して居た人も、その範圍が廣く昆蟲にまで及んで、來て、從つて一般動物に對する慈愛心が增して行き、その德が蟲けらにまで及ぶでありませう、それから又蠶を養ふ爲めに朝の淸い空氣を吸收しながら桑を採んで來つて。それをやると蠶が喜ばしそうに食べる、それが次第々々に成育して白玉を琢いたやうな美しい繭を作る、實に之は勞働の尊い賜物であつて、勞働の價は金銀珠玉にも優さつて居ります、コンナ風に勞働に趣味を感ずると共に、これ迄卑しいものと思つて居た、勞働が、却て貴いものであつたことを悟るのであります、又次には蠶を養つて行く間に種々の新らしい事實が起つて來る、これが日々家庭の話題に上る、又蠶のことから絹の話が起り、絹の話から流行の問題に移る、と云ふやうに連想は連想を追ふて、毎日淸新なる話材が斷へませぬ、

これが蠶を養ふて得られる家庭の利益でありますが、五十や百の試みに養ふ蠶なら、盆の上に紙を敷いて、その上に蠶を置いて日に五六度づゝ桑を遣れば、それで育つて行くので、大きくなつて口から絲を吐いて繭をかけるやうになつたら、盆の上に松葉のやうなものを上せて遣るのです、ソウなると蠶はその内で繭を作るのであります、唯蠶は育つ間に四五日置きに、ヂツトとして動かない時があります、此の時が眠でありますから桑を遣らないで、一日一晩計り經つて動き始めた頃に又桑を遣つて行くのであります、それで蠶は極く柔和な刺しも嚙みもしない蟲でありますから、皆樣が樂みに養はれんことを希望致します

# 新刊紹介

▲理想的商業（高島米峰著） 學者文士演說家兼本屋の主人なる米峰氏の著にして或は賣と買とは對等なりと叫び或は素見客を罵倒し或は釣銭道徳を論じ或は番頭小僧等の悲慘なる境遇に同情を寄す觀察鋭利にして議論頗ぶる痛快、ベレーが所謂「皆な商人たる」人類は是非共購讀すべき義務を有す。殊に「苦學生と商業」の一篇の如きは世の成功者流が頂門の十針たらむなり。（定價廿錢東京日本橋區檜正町一文祿堂發行）

▲詩集孔雀船（伊良子清白著） 清白の詩は幽麗にして悲痛なる節あり譬はゞ月光さやけき曠野に一莖の白百合を見るが如し、「漂泊」「旅行く人に」「花賣」「夏日孔雀賦」「華燭賦」の如きは篇中に於ける尤れたるものなり（定價七十錢東京京橋區銀座三佐久良書房）

▲小說新氣運（中島孤島著） これ孤島子が處女作にして曾つて每日新聞に掲載したるもの著者は本篇を起せるの當時トルストイの思想に滿腔の思慕を捧げつゝありしとか、下篇が出でねば此の葛藤が如何なる終局を結ぶやは分られど篇中に現はれ來る人物が皆な現代の社會組織の欠陷に煩悶し懊惱する態は可なりよく描かれたり只だ慾を言へばも些し深刻なる筆致を以て描かれなばと想ふのみ（定價卅五錢東京本郷區弓町一平民書房發行）

▲二十世紀の婦人（月刊） 暫く休刊したりし本誌は先月より再興せられたり。主筆は今井歌子氏。紙面は未だ整頓したりとは云ひ難けれど、今井氏が其獨力を以て之を經營するの意氣と抱負とに對し、我等は多大の敬意を表し、多大の同情を寄せざるを得ず。思想は今の婦人雜誌中、最も進步的の分子多し。（一部十錢、六冊前金五十五錢、麹町區飯田町五丁目其社）

▲社會主義小話 是は例の一錢本で、社會主義の精神を面白き俗話に書きあらはしたもの。傳道用、配布用として最も適當なり。（由分社）

▲儉約のすゝめ（桑田常藏譯述） スマイルスの自助論など、相並んで內外出版協會から出版せられたもので、マーデン氏の著「エコノミー」を譯述したもの。譯文なだらかにして一通り善く出來たる書なり。但し我等は儉約だの、貯金だの、保險だのと、人々がその樣な用心ばかりして生涯を送らねばならぬ、淺ましの此世を憎む者であります。ケチ／＼した儉約などしないで、人が皆な裕福に暮される樣な世の中にしたいではありませぬか。貯金などをアテにせずに人が皆な安樂に暮される樣な世の中にしたいではありませぬか。保險などといふ覺束ない事をせずに、安心して子孫を此世に殘し得る樣な世の中にしたいではありきせぬか。船の中などでこそ水を使ふのに儉約もせねばなりませぬが、水道の口からドン／＼と水が出る時には思ふさま自由に使つても構はぬではありませぬか。貯金をしないでも、保險をしないでも、人が皆な同胞兄弟と相親しんで共同生活をするならば、何の危險も心配も無いではありませんか。今の世の中に在つては、勿論儉約も必要でありますが、然しそれが爲に人情を偽ぶためしも少くはありませぬ。我々は今少し廣く大きく此世の事を見ればなりませぬ。（價二十錢）



wo Gokoku no Kami to iu ga,
Heiwa no Tame ni Shita Gisen dato
iu noni, Gokoku no Kami towa
Mujun mo hanahadashii dewa naika.
Warewaie wa dōshitemo Heiwa no
Kami to seneba naran to omou.

---

"Neisan goran" to furimuite.
Imoto wa mukō wo yubisashita.
"Aichan are wo shitteru no"
Ane wa niko-niko waratteru.
"Ara, shitteteyo tsutsuji dawa,
Neisan asuko ni ikanaino?"
Imoto wa pyoko-pyoko tondeiru.
"Issho ni itte asobō ya,
Sāsā Aichan irasshai!"
Futari wa nakayoku tewo hiite,
Tsutsuji ga oka no hōni yuku,
Hiwa haya nishi ni katamuite,
Tsutsuji wa yūhi ni moeteiru.

(*Horiuchi Shinsen.*)

---

Haru no Iro wo
Sakura no kage ni
Yuzurite ya,
Atatakaki Kaze ni
Chiru Mme no Hana.

(*Teiro.*)

---

Kawa zoi no furuki no-tsubaki
hana ochite, nagaruru yūbe
haru kuren tosu.

(*Hana-ko*)

---

Sakitsuzuku Sakura tanbo no
hana no nishi ni, oboro tsukiyo no
oborofuji miiu

(*Kyōgai.*)

---

Saraba kimi imayo wakare no
sake kuman, Umeni akaruki
izayoizukiyo.

(*Ryūha.*)

---

## Kimyō na Hito no Na to Toti no Na.

*Fuji Hana-ko.*

Sina moji wo tukau tame, jissai no yobi kata to moji to ga mattaku tigatte aru no ga takusan arimasu; soregatame ni ware-ware Nippon-jin wa doredake no meiwaku wo site oruka wo kangaete goran nasai.

Mazu tugi ni sono rei wo ome ni kakemas.

HITO NO NA.

茂木 wo *Moteki* to yomu.
利光 wo *Kagami* to yomu.
藥袋 wo *Minae* to yomu.
鴨脚 wo *Ichò* to yomu.
稀昂 wo *Suwari* to yomu.
兄上部 wo *Konokonbu* to yomu.
釋迦牟尼佛 wo *Nikurube* to yomu.
大佛 wo *Osaragi* to yomu.

TOTI NO NA.

一尺八寸村 wo *Kamazuke-mura* to yomu.
一口沼 wo *Imoarai* to yomu.
猫手 wo *Chokei* to yomu.
狸穴 wo *Mamiana* to yomu.
先斗町 wo *Ponto-cho* to yomu.
余田 wo *Makuri* to yomu.
東海林 wo *Shōji* to yomu.

Kono hoka mada-mada takusan aru deshō. Minasan, kore ni tuite tōsho nasare tewa ikaga des?

(*Rômaji yori.*)

## Tōsho o Tsunoru.

Rômaji nite omoshiroki Tôsho o oyokoshi kudasai. Tadashi amari nagai Mono wa komarimasu.

(*Katei-Zassi Kisha.*)

# RÔMAJI RAN

## Tennen no Kansatsu.

*Gotō Makita.*

FUE NO NE WO KONOMU INU.

Kinjo no ie de katte oru Seiyōdane no inu ga aru. Kono inu ga ibun no niwa ye asobi ni kita tokij ni, kodomo ga hāmonika to iu fue wo fukuto, itsudemo inu wa tachidomatte soshite swatte, kodomo no hō wo nagamete ori nagara, tokidoki kubi wo agete wōu wōu to iu koe wo dasu. Tōboe suru toki no yōna koe de aru. Sōshite fue wo fuite oreba inu wa itsumade mo tachisaru koto wa nai. Ongaku wo tanoshinde kiite otte omoshiroku kanjiru amari ni koe wo dasu yōni mieru. Jibun no ie wa takai dote no ue ni aru ga, arutoki dote no shita de gakutai ga ongaku wo soshite otta. Sono toki kono inu ga kite, dote no ue de itsumo no yoni suwatte oto no suru hō wo mite wōu wōu to naita.

IE WO TAZUNETE KAERU NEKO.

Jibun ga Shiba no Sakuragawachō ni sunde ita toki ni, kai-neko ga kinjo no niwatori wo torunode, sono shiri ga kite komatta kara, suteta keredomo jikini kaette kita. Sokode, uchi no haha ga, neko wo futokoro ye irete, me wo kakushi, kuruma ni notte, Shimbashi made itte sutete kita. Jibun no uchi kara Shimbashi made wa massugu ni hakatte 10 chō hodo aru ga, 3 ka me ni mata kaette kita.

Jibun wa Koishikawa no Hisakatamachi kara Hongō no Nishikatamachi ye hikkoshita Hisakatamachi ni oru toki ni, mainichi no yōni uchi ye kite yadonashi no meneko ga atta. Hikkoshite nochi ni Hisakatamachi no ie wa kowashi ni kakatta ga daiku no hanashi ni, kono neko ga mainichi akiya ye kita to iu koto de aru. Sorekara 7 tsuki hodo tatte tōtō kono neko ga Nishikatamachi no ie wo sagashiatete kita.

Nishikatamachi demo yadonashi no kitanai meneko ga kite comatta kara, Koishikawa no Hatsunecho ye sutetara, akuru hi kaette kita. Kondo wa sakaya no kozō ni tanonde, sumi-dawara ye irete, Koishikawa no Hayashichō ye sutete moratta. Nishikatamachi kara Hayashichō made wa sashiwatashi 14 chō hodo aru ga, kono meneko wa 10 ka me ni Nishikatamachi no ie ni kaette kita.

## Haha-fubuki.

*Noguchi Keitarō.*

Haru no hi no poka poka to ataru Ensaki de boku wa Inu no Kuro to tawamure te iru to Otera no doragane ga baka ni yakamashiku gan gan to natta.

Suruto Kuro wa bikkuri shite niwa e kakedasu totan imaga sakari no Sakura no eda ni tsukiatatta kara, tachimachi Hana wa fubuki no yōni harari harari to chitta.

## Heiwa no Kami.

*G. T.*

Kondo no sensō ni shinda hito

# 家庭雜誌第四卷目次



| 本誌代價 | |
|---|---|
| 一部 | 金十錢 |
| 六ヶ月前金 | 五十五錢 |
| 一ヶ年前金 | 壹圓 |
| （何れも郵税共） | |

| 廣告料 | |
|---|---|
| 特別一頁 | 十圓 |
| 普通一頁 | 七圓 |

▲本誌は毎月一回（一日）發行とす。
▲代價は小爲替を以てお送り下さい。郵劵代用ならば五厘切手で一割增に願ひます。
▲御注文の時は必ず何卷何號より何號まで何册の前金と明瞭に御記載を願ひます。
▲御手紙には必ず住所姓名をハッキリとお書き下さい。又御轉居の際は新舊の宿所を併せて御通知を乞ふ。
▲本誌は前金でなくては一切御註文に應じません。前金の切れた時には帶封に「前金切」と朱印を捺して上げますから御注意下さい。
▲歐米諸國よりの御注文は別に一册に付二錢づゝの郵税を申受けます。


明治三十九年五月卅一日印刷
明治三十九年六月一日發行

東京市麴町區元園町一丁目廿七番地
發行兼編輯人 堺利彦
東京市京橋區日吉町十番地
印刷人 中村[illegible]

發行所 東京市麴町區元園町一丁目廿七番地 [illegible]社

大賣捌所 東[illegible]

附錄一

# 由分社發行書籍目録

（十錢以下の御注文には別に郵税二錢を要す）

社會主義神髓　幸德秋水著　價二十錢
社會民主黨建設者 ラサール　幸德秋水著　價十五錢
革命婦人　平民社同人編　價十二錢
百年後の新社會　堺利彦抄譯　價五錢
理想鄉　堺利彦抄譯　價五錢
通俗社會主義　堺利彦譯述　價二錢
少年叢書 目のある人　堺利彦著　價十錢
社會主義問答　堺利彦著　價一錢
社會主義の詩　由分社編　價五錢
社會主義の話（發賣禁止）　深尾韶著　價一錢
月刊 社會主義研究　堺利彦編輯　價十五錢
家庭雜誌合本（第二卷）價五十錢（第三卷）價八十錢

發行所　東京市麴町區元園町一丁目　由分社

# 由分社取次販賣書籍目録

（十錢以下の御注文には別に郵税二錢を要す）

社會主義入門　平民社同人編　價十錢
經濟進化論　田添鐵二著　價十五錢
富の壓制　西川光二郎著　價十錢
土地國有論　西川光二郎著　價十錢
消費組合の話　石川三四郎著　價十二錢
地上の理想國 瑞西　安部磯雄著　價十五錢
英國勞働界の偉人 バアンス　西川光二郎著　價五錢
普通選擧の話　西川光二郎著　價一錢
廿世紀の怪物 帝國主義　幸德秋水著　價廿五錢
小說 火の柱　木下尚江著　價卅五錢
小說 良人の自白 上中下全三册　木下尚江著　價壹圓
小說 勞働問題　堺利彦譯　價卅五錢
家庭の新風味　堺利彦著　價壹圓
家庭夜話　堺利彦編　價壹圓
枯川隨筆　堺利彦著　價二十錢
言文一致 普通文　堺利彦著　價廿五錢
我家の犬猫　堺利彦著　價八錢
小品文集 半生の墓　堺利彦著　價卅五錢
小品千題 智識と趣味　斯波貞吉編　價卅五錢
少年少女 新遊戲集　西村渚山著　價廿五錢
社會主義名士肖像 畫葉書　一組六枚　價十錢
詩集 わか草　樋口龍天著　價三十錢
社會主義概評　島田三郎著　價三十錢
社會黨　西川光二郎著　價二十錢
トルストイ翁 日露戰爭論　平民社譯　價八錢

社會主義中央機關　**光**　毎月二回　一部三錢半

▲西川光次郎、山口義三の二氏、主として之を經營し、他の諸同志之を助く
▲日本社會黨々報は常に本紙上に掲載せらるべし
▲十部前金卅五錢、二十部六十五錢

取次所　東京市麴町區元園町一丁目　由分社



# 腦病 靜靖丸 頭痛

## 腦力を明快にし腦病神經病を全治す

**腦病** にて常に頭重く、記憶弱力く、忍耐力薄く、氣欝ぎ、不眠、頭痛を煩ふ人

**神經** 症にて僅の事を苦慮し、常に動悸、息ぎれを感じ怒り易く、悲み易く、心弱き人

**逆上** 症にて常に顔紅く、頭痛、眩暈し、耳鳴目かすみ、肩凝り背重く、便通少なき人

**頭痛** 症にて學生の常に煩ふ勉學性頭痛、感冒、徹夜、苦慮等より發する者其他總ての頭痛及ひ頭痛持の人

**不眠** 神經家又は老人等の夜分安眠を得ざる人、亦は苦慮、悲痛、等にて眠むられざる人

其他常に腦を勞する人及神經家亦は大酒家、肥滿家は持藥として此藥を服用せらるべし腦力を强健にし精神を快活ならしめ、中風、卒中風を豫防する希有の偉効あり、

**藥價** 二日分弱金拾錢 廿二日分(常備用)金壹圓 十日分金五拾錢
六日分金三拾錢 四日分金貳拾錢

**本舗** 東京市日本橋區藥研堀町 藥劑師 高木與八郎

## 逆上を引下げ睡眠を催し頭痛を即治す

家庭雜誌第四卷第六號　明治三十六年四月五日第三種郵便物認可　明治三十九年六月一日發行



印刷所　東京市京橋區日吉町十番地　近藤商店